
Destiny IN Magister Negi Magi 第一部らしいですよ？

黒灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / D i s t o r t e d D e s t i n y I N M a g i s t e r N e g i M a g i 第一部らしいですよ？

【ZIPコード】

N7189V

【作者名】

黒灰

【あらすじ】

「衛宮さんがネギま！世界にログインしました。

やつて来た時期が時期だつたり頑張り過ぎだつたりでネギ君の人生難易度UltraHardになつたのはご愛嬌。

「大罪」とは？なぜ衛宮さんのせいでUltraHardに？超・鈴音を更に追い込む強迫観念とは？

何はともあれ、

全て、衛宮さんのせいです

最初の一歩と大遭難

空に向かつて落ちる。

理への反逆。

時逆さに動き、リングゴは宙へと舞い上がる。

そしてこの身を腐らせるはずの時間は、逆流した。

逆巻く流れに身を任せ、流れ着くのを待つ。

世界漂流者は時間の旅にも出るか？

議論の価値 あり／なし

A・あり

衛富士郎は流れた。
時のポロロツカに身を任せた。

それは無自覚ではあつたが、自覚していたことも他にあつた。
自己の存在世界がズレた。

正確には平行移動した。

そして衛富士郎は晴れて完全逃亡を果たしたのであつた。

ちなみに、さよならとかありがとうと言つ両親も居ないし、
周りに色々親しい人が現れておめでとうの嵐とかそういうこともない。
い。

逃亡イクナイ。

衛富士郎を追う団体・集団は3つ。

一つ、魔術協会。
一つ、聖堂教会。
一つ、助けられ人。

理由としては、モルモット確保・秘匿義務破りに対する仕置、異端審問、色々あつて糺余曲折の逆恨みとありがた迷惑への復讐、などがある。

何を持つて3つの団体から逃げたとするか。

一つ、そもそもこの世界にはこれらの団体が存在しないということ。
一つ、恨まれる理由となる行動がまだ為されていないということ。
一つ、追つてこれる人間が居ないということ。

衛富士郎はこの世界において、不審にして潔白だった。

そして不可解にして不条理に現れたために、不都合な真実を覆い隠して生きるコトを強いられた。

筈だった。

しかし英雄は自重しない。

不可解だと思われるには情報網が発達しておらず、不条理な登場だと思われるには神の御使を信じる人間が多く、
不都合な真実はおそらくは誰も気にしないのだから。

今や時代は16世紀。

戦いは掃いて捨てる程のこの時代。

衛富士郎の巡礼が始まる。

進路が大幅に変わるとは、本人も予想していなかつたが。

きつかけは、そう。

彼女と出会つた、ある春の黄昏時

「合法口リ発見の巻から始まる」

「あ？何を言つている士郎？」

「まあこれがいり始めるんぢやない
「何故爺口調…………？」

ひめの西洋の不老少女（繪書き）

前に書いた奴はぶん投げた。

それでいい、そのままでいい。

ぶん投げたって、間違いなんかじゃないんだから

！

とある西洋の不老少女

流れ続ける衛宮・士郎。

戦いは繰り返された。

彼の行処が血が流れる。

否、彼は血の舞台へと足を運ぶ。

それ以上血が流れぬように。

そう願つて生きてきたのだから。

バカは死んでも治らない

議論の価値

あり／なし

A・なし

彼が彼女と出会ったのは偶然だった。
というより出会ったとすら言えない。

彼はただ彼女を街の片隅で見かけただけで、
彼女は彼を視界に收めることも無かつた。
だが、正義の味方モドキの眼に映るその姿は、
あまりに優しく、美しかった。

「俺はロリコンじゃない。確かにあの時ドキドキした
のは間違いない、今もちょっとドキドキしてる、けど俺は違う」

彼女はまるでフランス人形。

衛宮・士郎は彼女限定ロリコンになつた。
嘘だけど。

彼女は人形劇をしている。

糸を巧みに操り、往来の人々を楽しませる。

躍動に富んだ動き、まるで魔法でも使っているような。

2つの人形を花のような笑顔で踊らせてている。

だが、その軽やかなステップを編み出す少女の眼は、

諦観と悲観。それに溺れ死んでいた。

・・・・・ああ、だからか。成程、確かにまるで人形だ

世界の風という奴に削られて摩耗していた。だからそれを隠すような笑みは貼り付けられた肖像画。

ガラクタ染みた笑顔。恐らく、嘗てそつやつて笑っていたのだろう。懐かしい記憶を掘り出して再現したのだろう、贋物の表情。

明日の自分にすら希望を持てなくなつた、答えを見失つた哀れな冤罪被害者。

だが、正義の味方は手を伸ばさなかつた。

・・・・・おそらく有りふれたことなんだろう。彼女は特別ではない。

そして、これからもこうやつて生きていくんだろう。こういう眼をさせないために戦つ。いつもの事だ。

ただ彼の決意が強まるだけの出来事。

その時だけなら。

だが、これより数日。

その出来事は別の、大きな意味を放つことになる。

時は16世紀初頭。

魔女狩り最盛期の幕開けでもある。

この仏蘭西の片田舎でも魔女狩りは行われた。

春の仏蘭西のある街で大規模な処刑があった。

この数日なぜか見かけなかつたあの少女が火にくべられようとしている。

衛宮・士郎は驚愕した。

「…………あの子は、魔女なのか」

「そうさ、2年くらい前からこの辺りをぶらついてた子なんだが、歳を取らないわ、魔法みたいに人形を動かすわで、まさに魔女だよ、間違いない。しかもあの魔女は今までに何度も魔女だと疑われたんだとさ。しかも、顔を覚えている教会の騎士が居たらしい。何と、

15年前と10年前にあの魔女によく似た金髪の少女を見たらしい。その時から疑っていたんだとさ。これは間違いないだろうね、大魔女だよあれは」

「…………そんな」

…………それだけである子は死ぬのだ。

似ていいだけかも知れないじゃないか。

時は16世紀初頭。

それだけである子が死ぬ時代。

士郎は呆然としていた。

そして、あの子は磔にされて、ついに火を焚かれた。

その時に苦笑いを浮かべた少女が見えた。

錯覚ではない。

俯いた顔は太陽に照らされて逆に陰つて見えるが、見えた。

諦めだ。悲観だ。彼女の心からの表情が見えた。

瞬間、バカが飛び出した。

……時代が何だ、こんな時に困った人を放つておくなんて出来るか！

士郎がこの世界の「裏」で戦つようになつてから、2・3年。
その中で非常識な移動方法を見た。

「瞬動」だ。

この世界では「氣」と「魔力」の一種類の力が存在する。
双方は反発し、同時運用は不可能という。

今まで居た世界とは全く違う道理のもとに存在する力。

回路の「魔力」とこの世界一般に言われる「魔力」は違う。
小源オドと大源マナ。

この世界はマナ魔力で奇蹟を起^シす。
起きる奇蹟も趣を全く異にする。

派手だ。

とにかく派手なのだ。自分の知る魔術と比べて。

光線は飛んで来るわ、氷の礫が雨霰だわ、とにかくド派手だ。

それと別に、士郎は氣の扱いも少しは覚えた。

「チラは生命から生まれる力。コレも小源に分類出来るだろ？」
しかし「チラはオド魔力と違い、毒にならない。

魔術回路は神秘を執行する器官だ。

だが同時に毒袋もある。

それと別なのだ。

・・・・・ものは試し、というやつだ。

ある日、士郎は回路を走らせながら氣を発してみた。

反発はしない。

恐らく生命力同士で親和力があるのだろう。

それと別に、回路を走らせながら魔力を集中。こちらも同じ。

神秘の行使力という点が共通するからだろうか。

更に、魔力・気・回路魔力を同時に行使すると、やはり反発した。中間材としての役目を果たすわけではないようだ。

それはともかく、

必要だったから覚えた。魔法の力を。

そうしなければ魔獣や「悪い」魔術師と戦えないのだ。自分の「魔術」をおおっぴらに使うわけには行かなかつた。今度はうまくやる。

その決意も以つて第2の世界で戦うと決めたのだから。

士郎は飛び出して、すぐに足に魔力を集中させる。

補助魔法は必要ない。いや、その時間すら惜しいのだ。彼女がこれ以上傷つかないように、急ぐ。

距離は残り50m余りか。

しかもあの場は群衆、警吏、教会騎士で囲まれている。だが、10秒もかけるつもりはない。

5秒だ。

5秒あれば十分だ。

それを可能とする術が有るのだから

！

……「んな所で死なせたくない！」

「同調・開始！」

撃鉄を降ろせ。自分の信頼する力も加える。

信じる力が、実現する力だ。

回路が回り出す。

力は更に身体を巡る。

その力を足の裏に集中させ、

瞬動！

一度目。

人混みの無い一つのラインが見える。

そこを突き抜けて、距離を詰める。

紅い閃光が疾つた。

縮めた距離は20m。

減った時間は0・75秒。

目の前は蟻一匹通さぬ構えで十字架を囲む教会騎士とその取り巻きとなる200もの雑兵。

あの少女を恐れていいるのだろう。ある程度距離を取つて囲んでいるのはそういう意図もあるのか。

そして構えられたのはバイク。針山だ。

……堅固な守りだな・・・・・これを轢き倒すのは骨だ！

だから、2度目は。

宙に跳ぶ。

高さは3m弱。

コレでは槍の針山を超えない。

20cm落下する前に、

虚空瞬動！

空を蹴つて更に上方・前方へ。

これで高さは7mを確保した。

5mほど下方か。

十字架の彼女の高さはそこだ。

まだ火は届いていない。

そろそろ得物を準備しなければ。

「投影・開始！」

用意するのは決まっている。

弓と矢だ。

詰めた距離は7m。

費やした時間は1・50秒。

3度目。

動搖で騎士達は動けない。どよめきの始まりすらまだ聞こえない。

……大丈夫だ。このまま逃げきるまで恐らくマトモに行動出来まい。

虚空瞬動！

さらに15m距離が詰まる。

5秒経過するまでまだ2秒弱残っている。

槍兵の構えは越えている。

……今だ！

神速で弓に矢を番え、拘束部分を剥ぎ落とすように縄を撃ち抜く。右肩の直上を、右脇の傍を、そして最後に右膝の傍。

金髪の少女の戒めは解き放たれた。

4度目。

虚空瞬動！

……彼女が火に落ちる前に抱き留めてそのまま抱えて逃げる！

それで終わりだ。

5秒強の時点での衛宮・士郎が少女を抱えた。

少女は初めてその時、士郎の姿を視界に収めた。

「え？」

自身が助けられたことは愚か、何かが起きていたことすら気づいていなかつた。

そんな彼女の驚愕も無視して士郎は再び跳んだ。

虚空瞬動！

磔状態の彼女の左側面を太陽が照らしていた筈だつた。だが、今、彼女の顔の右半分が照らされている。

少女を抱えて士郎は太陽に向かつて走り出していた。

「お、お前、一体何を」

「助けた以外のどう見えるつて言つんだ！」

「いや、何故助けた！？」

「決まつてゐるだろ！？辛そうな顔をしてた、困つた女の子を放つて置けるか！」

「んな……！？」

……馬鹿か！？そんなことで魔女を助けるのかこの馬鹿は！？

「馬鹿か！？」

「ああ、馬鹿だ！正義の味方になんてなりうつとする馬鹿だ！でもそれに憧れてしまつた！後悔もない！」

「魔女を助ける正義の味方がどこに居」

「此処だ！君の目の前のこの馬鹿がそうだ！」

……眩しすぎる。毒になるくらい、自分を殺してしまつそつながらい。

だから、教えてやらなければ。

「そうか、助けたこと、後悔させてやる。私の名はエヴァンジエリ

ン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼、『悪の魔術師さ』

口リ誘拐！（前書き）

1万字3日で書ける人とかマジ信じらんねえ
具体的にどなたさんとは言いませんが！
痺れて憧れるズエア！

口リ誘拐！

正午前の平原を太陽の方角に向かつて走る男がいる。紅い外套を纏つた風変わりな格好の傭兵だ。

可笑しなことに、その両手には金髪の少女が抱えられていた。ついには、

「魔女が逃げたぞ！」

百数十人の兵士に追いかけられている。

その可笑しな光景は、『魔女』という単語が聞こえなければ

どう見ても誘拐犯です。本当にありがとうございました

駆け落ちと誘拐と冤罪死刑囚の救出の違い

議論の価値

あり／なし

A・あり

……面妖な術を使って現れたあの男。魔女の下僕に違いはあるまい。あの男も何としても殺さねばならぬ。あの男もあの少女は魔女で間違ひなかつたという証明にならう。

衛宮・士郎の出現により、エヴァンジエリンの魔女疑惑は確定へと変わった。

これより後、あらゆる街で一人の特徴が出回ることは間違いがなかつた。

安寧には程遠い旅が始まる。それが既に此処で決まつてしまつていた。

「……エヴァンジエリン？」

「そうだ。この名前、貴様も聞いたことがあるだろうよ。さっきの動き、『クイック・ムーブ』と『エアリアル・クイック・ムーブ』だな？お前も『裏』の住人だ。真祖の吸血鬼の名前くらい覚えているだろ？」

「確かに、聞き覚えくらいはある。」

だが、そういう評価が間違いだったことは往々にしてあるし、実例をまず知っている。

士郎はある反英雄を思い浮かべる。

「……アイツの眼だ。この子の眼は、それに何処か似ている。」

裏切りの魔女。

ありとあらゆるもの裏切つた魔女として悪名高いあの女性。

コルキスのメディア。

ギリシャの神代の魔女。

「……実際は相当苦労人だったわけなんだけどなあ・・・・・・」

そう、裏切りの魔女は裏切られた少女でもあった。

ひたすらに騙され、その結果磨耗した。

だがたつた一つの願いが残つていたのだ。

わたしはただ、帰りたいのです

そう願つて参戦した彼女。

そして願いは遂には叶わなかつた。

聖杯は誰のものにも成らなかつた。

だが、彼女は恐らく幸福だつただろう。

一時の黄泉帰りの中でその願いに変わるものを見つけた。

葛木・宗一郎。

彼こそが彼女の聖杯。

寄る辺。

愛する人。

「……ああ、確かに知つてゐるよ。でも、だから何だ？」

「……は！？」

「俺はそういう評判をあまり宛にしない。経験則上」

「……本当にコイツは正気なのか！？」

「…………单にお前がそういう人間だと言いたいだけじゃないのか？」

「そういうわけじゃない。本当に知り合いにそういう奴がいたんだ。で、君はそういう類の人間の目をしてゐるよう見えたが？」

「で、どういう奴だ。私は、どういう奴だと言うんだ」

「騙された女の子、つて感じか？しかも報われない」

「……ッ」

「……そんな生易しい言い方で表せるか！だが……」

「当タリダゼ、ゴ主人。認メロヨ？」

「チャチャゼロ・・・・・・？」

影の中から一つの人形が這い出して、並んで飛行を始めた。

「生きた人形か？」

「オウ、幼女趣味デ魔女ノ騎士氣取り野郎。オレハチャチャゼロッ

テモンド。真祖ノ吸血鬼ニシテ悪ノ魔術師エヴァンジエリンノ第一
従者ダ。才前、見ル目有ルナ。幼女趣味ノ病気持チダケドヨ、ケケ
ケ

「病気じやない。ドキドキしただけだ。少し「

「知ツテツカ?ソレ病気ツツーンダヨ」

「違う!間違いなんかじやない!」

「病人ト醉ツパライハ良クソウ言ウケドヨ、ケケケ

「こいつ・・・・・人を幼女幼女言いよつて・・・・・
チヤチヤゼロの言葉のナイフは過たず士郎の心の核を穿ち、

「 ぐはつ

「おい!?」

「ケケケ」

走つていながら、そう呻いてうつぶせに倒れた。

もちろん、エヴァンジエリンは抱えられた両手を頭上に上げられ
いたせいで傷一つない。

チヤチヤゼロの飛行も止まり、彼女は浮遊して停止する。

「おい!大丈夫か!?」

「...人を心配するのも久しぶりなんじやないだろ?」
か? 言つてからエヴァンジエリンは考える。

そして幼女趣味の紅い傭兵は立ち上がる。

当然、少女を地面に立たせてからだ。

改めて抱え直して走りだすと、

「 大丈夫だ。問題ない

と返事を返した。

「色々性癖に問題があつたようだが大丈夫か・・・・?」

「君を抱えて逃げることぐらいは出来る!安心してくれ!」

「幼女抱えて逃げる人間が言つと本当に病気に聞こえるぞ!?」

「病気じやない!」

「生真面目な病人はそうやつて誤魔化してぶつ倒れて死ぬんだ!お
前もそういう類の人間だ!人の心配を考えろ!」

「大丈夫だ！俺なんか心配するな！」

……あれ！？重病人をベッドに押し留めるような文句になつてないか！？

いや重病人だけど！？性癖的に！

エヴァンジエリンの思考回路は今や混乱で自失の状態にあつた。

「ゴ主人、才前バカダナー。バカナ会話ニ乗セラレチマツテヨ」

「うるさいボケ人形！」

「病氣じやない！」

「黙れ病人！」

「ケケケ、幼女ガ怒ルトソイツ興奮シテモツト病氣ガ進行スルゼ。

「ゴ主人無情ダナー」

「幼女幼女言うなあー！」

そうやつて騒いでいるものの、一向に兵士は追いついてこない。それもそのはず。

衛宮・士郎はこんな会話をしながら瞬動で移動しているのだ。常人はその動きの軌跡すら捉えられない。

かくして、二人と一体の逃避行が始まった。

君が嫌い言つても君を離つてこられんじゃ（前書き）

それ、ただの誘拐ですよ。

君が嫌と言つても君を奪つてこじらねじゅる

お約束ながら隠れるのは森の中だ。

走りだしたときには昼前、撒いたことを確認したのは随遇だ。

そして今はやや夕暮れ。

森の中の少し開けた所で止まつた。それまで何故かエヴァンジエリオンは抱きかかえられたまま。

彼女は黙つて抱かれていた。

士郎も黙して語らず、ただ安全な寝床を探して歩き回つていた。

内心が病気な状態であつたわけでもない。

嘘ではない。

- - - - -
正直アイシはどう見ても口コロンなんだが、それいかんぢいよ。
議論の余地
ある／ない

A・ない

著者注：No touch! yes initiate.

著者注2：小生別に口コロンでは御座りぬ。虹口つは此れ皆此れ哉思つけどよー

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

紅い男が周りから新となる枝を集め始めた。

その手際は野営に慣れていることを伺わせる。

陽が沈む前には十分な量を集め終わっており、すぐにキャンプが始まった。

「アイ・アム・ザ・ボーン・オブ・マイ・ソード・火よ灯れ」
アル・デスカット

呪文が唱えられた。発動媒体は左手の手甲だ。

積み上げられた薪に火が灯ると、士郎は自身の影に手を突つ込み、パンと干し肉を取り出した。

衛富士郎は食料を、無理やり覚えた影魔法によつて作った「倉庫」の中に溜め込んでいた。

……食い扶持は増えたが、しばらくは十分だろう。

取り出した食料を目の前で三角座りでコチラを見ている少女名は『エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル』、賞金首の吸血鬼、自分も聞いたことがある に手渡す。

それを受け取ると、

「……毒は入っていないだろ？」「入れるか！」

「いや、眠剤か……？」

「君は一体何を考えた！？」

「幼女趣味病人がやることなんぞ知れた事！」

「病人じゃない！」

「…………まあ、関係ないがな。真祖の吸血鬼にはな……」

そう言つと彼女はパンを頬張つた。

「話には聞いているよ、それは。それでも毒なんか入れたりしないつて……」

それを見て安心し、士郎もパンに齧り付く。

この時代のフランスのパンは現代よりも黒く硬い。

フランスの小麦粉の粘性の弱い点が原因だ。

そして未だフランズパンと呼ばれる形は現れていない。

原材料はライ麦と大麦。保存が効く、大きい物が多い、という特徴もあった。

ライ麦の酸味が長期間の保存を可能にする、とも言われる。日持ちはするのだ。だが

「・・・・・硬いぞ」

「すまない、少々日が経ちすぎていたかもしね。パン粥にするか?」

「いや、構わんさ。水は貴重だろ?」

「済まないな」

そう言うと力任せにバリバリと噉み砕き始めた。

少し恥ずかしそうにしているのか、眉間に少々皺がよっている。

「これと乾し肉があるが、それで足りるか?」

「足りる。といつまじこまでの施しも要らん」

「そうか、良かつた」

その反応を善し、として、士郎はこの後のことを考え始める。
……勢いで助けたことに後悔はない。

だがこの子は賞金首で、『あちら側』でも名が知られすぎている。
恐らくそれを魔女狩りから助けた俺の特徴も広まつていいくだろう。
わて……

士郎のパンを齧る口が止まっていた。

どうやら考え込んでいるようだ。

エヴァンジエリンは士郎をずっと観察していた。

その隣にはチャチャゼロが座っている。

……この男の人となりはわずかに把握出来た。

馬鹿だ。お人好しだ。恐らくは善人だ。
吸血鬼は傭兵を先ずはそう勘定した。

そして気づいた。

失念していた。まだ名前を聞いていない。

「まだ聞いていないぞ」

そう話しかけると、田の前の男はすぐに思考を止め、少女の言葉に反応した。

「…………ん？ ああ、すまない？ 何をだ？」

「名前だ。こちらに名乗らせてそちらは何も無しか。いい度胸じやないか、真祖の吸血鬼を相手にな」

そう凄むと、男は恥ずかしそうにはにかみ、名乗った。

「ああ、済まない。シロウ・エミヤだ」

「真祖の吸血鬼について言つことは無いのか？ まあいい…………真祖の吸血鬼について言つことは無いのか？ まあいい…………」

「俺の生まれは極東でね。東方見聞録つて読んだこと有るか？」

「まあ、一応は。あのトンデモ本か」

「いや、実は結構的を射てるんだ、あの本」

「一応聞くが、何故分かる」

「そのトンデモ本に、ジパングって有つただろ？」

「黄金の国、ジパングか。それがどうした？」

「そこだ、俺の生まれは」

「…………は？」

「実際のところは、黄金なんて限られた場所にしか集まつてないけどな？ 金山は有るにしてもさ」

エヴァンジエリンは沈黙した。

…………まさかそんな馬鹿なことを聞かされるとは思わなかつたぞ…………

…………

湧いたのは怒りではなく純粋な驚き、そして呆れと疑問だ。隣で座る殺人形もケケケ、と笑つてはいるが多少驚いているようだ。

「欧洲の生まれでは無いと思っていたが、まさかそんな所からどうやって」

「それにはちょっと事情がある。まだ話せない、かな?」

「私に隠し事か? フン、まあ一応助けられた義理はある。どうせ死ななかつたがな」

「すまないな。でも、死ぬ死なないなんて関係ないと思つ」

「何でだ?」

「焼かれる苦しみは変わらないだろ?」

……お人好しな奴だなあ・・・・・しかもさつきから言つてゐるはずだが。

「私は真祖の吸血鬼で魔術師だ。火ぐらい何とでも出来る」

「それでもだ」

……しかも頑固と来たか。厄介な人間性だな。

エヴァンジエリンは内心苦笑する。

会話が止まつた。

そこで、先程この男が何かを考えている様子だつたことを思い出す。

……問うてみるか。

「そういうえば、さつき何かを考えている様子だつたが? 邪魔して悪かつたが」

「いや、構わないよ。名乗らなかつたこつちが悪い。で、何を考えていたかつてか? これからのことだよ」

……これからか。どうせあの街の周囲にはもう十年は近づけまい。このシロウという男はどう考へてゐるのか。少し、意地悪を言つてみよ。

「これからか？私の首を引っ掴んで賞金に引き換えに行くか、それか首を斬つてそれを持っていくか、どちらにしようか迷っているのか？ククク」

ロンリー ロリ、ロンリー ロリが脱ロンリー ロリ（前編）

ロンリー ロリはロリ ロンな方の緑川さんが言つてた。

そして3日で一万字突破したんだがウオイ?
やつたね!

ロソリーロリ、ロソリーロリが脱ロソリーロリ

「なんですか

5

ため息を軽く付いて、大の男が拗ねている。

いや、拗ねていることが明確に分かるほどの表情の変化はない。

たが確かにこの傭兵は抜ねでした

「の」の字ティックに。
だつて焚き木に枝を突っ込んでゴソゴソやつてるんだもん。

いい男が拗ねますと何かその・・・・・可憐いでしょうね！つー？ね！
ねえ！？

by 三野先生

議論の価値

あけなし

A
・
あり。

ただ、端的に言つて先生ははただ自分の旦那の可愛さを
ペシトの「」とく褒めちぎつてゐるだけかと判断します。

114

あの……恥ずかしいからひとつと重してくれないかな?

b
y
件の日
那

「そんなことをするつまつは無いよ。最初から、今も。ただ」

「ただ？」

「君を守りながら逃げる経路を考えていた」

「助けて終わり、ではないのか？この男。

エヴァンジルは疑問を持つ。

「？」

故に彼女の首が傾く。

「これから恐らく追手が付くだろう。一つは魔女狩り側。もう一つは魔術師側だ。

君の目撃情報がこれから広がり始めるはずだ。魔女が逃げたんだからな。しかも下僕と思しき男まで付いたんだ。どちらも警戒を強めるばずだ

「成程な」

彼女の首が元の角度に戻る。意を得たのだろう。

「そこでだ、この際俺が君を守りながら逃げよう、と」

「いや何でそうなる」

再び20度ほど首が傾き、表情が少々険しくなる。

「どうせ俺は君の新しい従者と見られるだろうからな。傭兵業もこれで店じまいだ。だから

それに対して紅い男はこんな提案をした。

「君が俺を雇つてもられないだろうか」

冴えた提案か、戯言か。

それは神のみぞ知る。

「何も払わんぞ？」

「それでいい」

「なら何が望みだ・・・・・・？」

「ただ君を守るうつと思った、それだけでは不足か？」

「な・・・・・・・・おま・・・・・・・・！」

「

……まさか本当に幼女趣味を理由に助けようとした病人なのでは……
・・・・・！？

久しぶりに恐怖を覚えたぞ・・・・・・！？

「眼の前の困った人を先ず助けられずに何が正義の味方だ。俺は、
君を助ける」

「……良かつた！違つた！確証はないが！だが・・・・・・
「・・・・・・じゃあ何故私なんだ。他の困った人を助けに行け。
さあ何処となりとも行け」

「それが君を見捨てる理由になるのか？それは違うと思う」

「むう・・・・・・私は今まで一人でやつてきたしこれからもそ
つもりだが？不老不死だしな。

だが

「

……譲歩してやるか。しつこい。だが、もう少し意地悪にしつ問お
う。

「ならば、契約期間は？そちらで指定して構わん。それくらいには『
付き合つてやらんでもない』。どうせ、しばしの戯れになる」

「ならば君が死ぬまで、でも構わないか？」

そんな問い合わせに對して、意表を付く答えが返つてきました。

「何をそんな馬鹿なことを

「

エヴァンジエリンの訝しみはここで頂点に達する。

「いや、出来るんだ。これが」

だが士郎は真剣な　　だが少し笑みも混ざつてている

表情

で、しかし軽い口調で語る。

「ホラを吹くのならやめる。慰めるのならやめる。騙すのは許さん」
エヴァンジエリンは早口で捲し立て、嘘を責めようとする。
しかし士郎は変わらぬ調子で、

「 本当だ。

とあるやんごとなきお方、から賜つたある品のせいで不老不死だ。魔力の有る限り、という条件が付くんだがな。君の仲間、と言つていいのか

「 何だと」

驚くべきことを告白した。

「 経緯は、まだ、言えないけどな」

そして、そんな時に彼女の第一従者はもう寝ていた。

衛宮・士郎の旅路について説明せねばなるまい。

元いた世界では、彼は彼を知る者が知る通りに、やはり正義の味方を目指していた。

聖杯戦争を乗り切った。

彼とその従者、そして魔術の師とが乗り越えた。

固い信頼で結ばれた主従・師弟だったと言えよう。

それも戦いの中で築かれたものであり、戦いが育てたものは絆だけではなかつた。

彼は、理想を現実にしようと走り出す。その起爆剤を創りだしたのも聖杯戦争だつた。

従者は去つた。師匠に力を得るために教えを乞つた。師匠に付いて、倫敦にも渡つた。

そこで非才ながらも魔術の学びを修めた。

そして、力を手に入れ、飛び出した。

誰も止められなかつた。

戦地巡礼たたかいが始まつた。

彼は不敗、不退。

その姿を尊く思う人々もあつた。

だがついに誰も理解は出来なかつた。

その中で自分の行く末にも何となく勘づいていた。

彼の肌は黒ずみ、対象に髪はくすんだ白髪に変わつていて。

纏うのは紅い外套。

・・・・・なんだ、そういうことだつたのか。アイツも俺も、

同じだつたのか。

士郎はそれに後を押された。

押されてしまい、さらに止まらなくなつた。

戦いの結果、怨みを買つこともあり、田を付けられることがあります。ついに追い詰められた。

彼は瀕死。

隠れたのは良いが、もう逃げ場がない。

ネズミが袋に入つただけだ。

だが、そこに現れた。

魔術使いの先生が現れた。

彼女は腕を組んで怒つていた。呆れていた。諦めていた。

だが、信じていた。彼女自身を。

希望を願つていた。彼の未来に。

だから、彼女は彼を助ける。

「士郎

「とおさか・・・・・?」

息は絶え絶え。それでも士郎は田に見えた彼女の名前を呼ばずには居られなかつた。

「これ、預つてきた贈り物。あの子がね、『主人への最後の奉公です。王からの餞別、受け取りなさい。もう必要ありませんしね』だつて」

「 え？ 「

そつ言つて彼女は彼にあるモノを埋め込んだ。

全て遠き理想郷。
アヴァロン

そして、魔力の溢れるルビーを彼の口にねじ込んで飲ませた。魔力が身体に漲ると共に、士郎の傷が忽ち癒えていく。

ソレと共に、何かの情報が流れ込んでいる。

本物だ。俺の投影品にコイツは無いはずだ。
だが・・・・・いや・・・・・つまり、

しかも何だ？この情報は・・・・・剣？剣、剣、剣、剣・・・・

・

彼女は、元気だったか？それと、この情報は・・・・

・

「理想郷でのんびりよ、アンタの考えてる通り。衛宮くんの惨状が時計塔の私のところまで聞こえてきてね。呆れたわ、本当に。それでちょっと助けに来てもらおうかと思って行つたんだけど断られてね。その代わりだつて、コレ。情報？それもとある馬鹿からの手助けらしいわ。約10年越しの

「いや、どうやつて行つたんだ？それと・・・・・馬

鹿？誰だ？」

「そつちはコ・レ。で、馬鹿は馬鹿よ、知らないわ

彼女は笑つてあるモノを取り出す。

そこにはあつたのは万華鏡。

万華鏡の短剣。

「…じゃあ・・・・・・・・

第一魔法「並行世界の運営」。

その力の体現、宝石剣。

彼女がそれを手にしている。それが意味するところはただ一つ。

「そうよ、至つたわ。アンタが三途の川の向い側なんてところに至る前にね。その応用でチョチョトイよ。言ひほど簡単では無かつたんだけどね……！」

「…………すまん」

「ありがとう、よ。士郎。これから警れ高い若き『魔法使い』がアントを救済してやろうってんだから感謝しなさい、謝る前に

「すま…………ありがとう」

その返答に気を失くした凛はかつてのよっこ、指を立てて笑顔で返す。

「よろしい。で、その鞄なんだけビ、アンタのものよ。アンタがそれの『扱い手』」
そしてトントンテモナイ」とを吐いた。

「…………はー?」

「セイバーは貴方を心配していました。すぐ危険の前に立つて死にかけるもんだから彼女はもうこの際だから死なないようにしてしまえ、とばかりにこれを貴方にお与えになつたのです。これどういうフザけたことか分かつてるわけ衛宮くん！？」

「いや、俺にもさっぱり何がなんだか！？」

凛の表情は「あくま」の笑みから鬼の怒り顔へ。変化の忙しい美女だ。

そして再び笑顔に表情を戻し、改めて士郎に問いかける。

「アヴァロンの効果は覚えてるわよね、士郎。身をもつて、ね？で、アヴァロンの伝説上の位置づけというか役割も覚えてるわね？じゃあ問題！アヴァロンを無くしたアーサー王はどうなりましたか、答

えなさい衛宮君！」

凛はやはり怒つて いるようだ。

「えーと・・・・・・不老不死じゃなくなつた？」

「パーフェクトよ。つまり、アヴァロンは貴方のモノ、貴方はどうなるわけ？」

「まさか・・・・・・！」

士郎の驚愕にも関わらず、凛は笑顔で告げる。

「そうよ、不老不死。アンタはこの世界で最も異端よ。じゃあ

心置きなくこの世界を去りなさい。これはその馬鹿の願いでもあるみたいだしね。英雄エミヤに成り下がる前に、とつとと消えなさい」

告げ終わると彼女はいきなり真顔になり、魔力回路を回し始める。

「どうこつことだ・・・・・・って、そんないきなり無体な！」

「つべこべ言わない！アンタこの世界にもう逃げ場ないんだから！」

行くわよ…

「ちょ！遠坂、待

士郎が待つたをかける間も無く、彼女は容赦なく彼を『落とした』。

これが衛宮・士郎の漂流記のプロローグだ。

彼は彼女の隣に立つに相応しい条件を手に入れていた。

そして、何の気まぐれだったのか。

あの彼が、士郎に贈り物などとは。

そしてヒトリ残つた彼女。

彼女は自分の判断を信じている。

彼女は彼の希望を信じている。

「アンタはどうせ諦めないだろ？ から。思いつきり遠い世界に飛ばしてやったわ、どんなのかは知らないけど。まあがんばりなさいな、士郎」

「幸せ探しでもしてくれるのが一番心配ないんだけど、ねえ？ そう思つてしまふ。セイバー、アーチャー……」

口のオイタは許すが情け（前書き）

口リネタを・・・・・・・・自重しよつと思つんだ・・・・・・・つー
まあそろそろ「伝法口リ発見の巻」が終わるところだとなんだが。

口りのオイタは許すが情け

……秘密の多い男だな。

エヴァンジエリンが見ているのは、士郎の顔だ。

その顔は懐かしい」と振り返るような表情。

は見えなかつた。

るよ。積だ。

いや、何で癪に障るんだ？自分の事だがよく分からん。

それは、いわゆる
気鬱なる
ひとつ病氣といつてやつだ。

貴方の心見えてるだけの出来事の二種類
しづめる方法は私が知っています。私に任せてくださいお嬢さん。
幼女

touch?

Y
e
s
/
N
o

It's fant

O
! .
! .
! .
! .

ガチヤン

YOU ARE UNDER ARREST.

その後、彼の姿をシャバで見たものは居なかつた。

Never forget it!

その感情は、恐らく何十年ぶりに湧き上がる感情だつただろうか。彼女はもう、秘密の多い男に惹かれるという年頃でもないが。

何となく、気になる男だ。

不老不死で正義の味方志望で、それでいてこんな私を守るという。
裏がない、と思うほうが可笑しい。世間知らずのお嬢様だったなら
信じるだろうが。
王子様に憧れる
わるもの

お嬢様、
か。

と、エヴァンジエリンはそこまで思考すると、血刃を振り返り始めた。

…… そういえば、私も正真正銘、上級貴族のお嬢様だつたな。
まあ、吸血鬼に成りたての世間知らずの頃なら無条件でこの男に縋り付いただろうな・・・・・・

昔の自分と今の自分を比べる、という行為は彼女には珍しいことだった。

嫌な記憶を掘り返すことは出来るならば避けたい。
人間にとつて当然の理由だ。

元人間だった彼女もまた例外ではない。今でこそ最強種の化物ではあるが。

そして、最後に行き着くのはこの一点。

……今の私は、この男に縋り付くだろうか。
ある種、振つて湧いた幸運だ。

自分を肯定する人間が居るということは、それだけで心の支えになる。

例えその人間が私よりも弱かつたとしても、私を肯定するその人間は私より『強い』だろう。

それに縋りたくなるだろう。昔はもつとその傾向が顕著だった、と思う。

だが・・・・・だが

孤独に長く漫かっていた彼女はある恐れを抱いている。

彼女が人形を従者にする一つの理由もある。

それは、

……裏切るのだろうか。

この男は。

それが怖い。

信じる事が、恐ろしくて堪らない。

いきなり支えを奪われることに、また堪えられるのだろうか。
もしそうなつたとして、また慣れていくのか。

・・・・・嫌だ。

そんなことは嫌だ。

三日月が夜空に輝いている。

わずかに光が溢れる夜で、炎が揺らめいていた。

一人と一体を月光と炎が照らす。

そして、薪の音だけが波紋のように響く。

音が見えるようだ。

森は静謐の中にあつた。

「…………で、だ。俺を雇つか、どうか。決めてくれないか」「…………考えさせろ」

士郎がエヴァンジエリンに問いかけると、彼女は迷いを晒した。だから彼は、その迷いを肯定する。

「そうか、そうだよな。…………うん、今すぐ決めてくれなく

てもいい。ただ、ちゃんと答えてもらえたと嬉しい」

「ん…………分かった」

そう答えると、彼女はどこか上の空になり始めた。

悩んでいるのだろう。

…………相手に見られながら考える、つていうのも中々心が落ち着かないだろうな。

・・・・・よし。

士郎は布を3枚ほど『影』から取り出し、エヴァンジエリンに渡した。

二人が居るのは、パリから更に東にある森。

パリ周辺はは所謂西岸海洋性気候だ。

夏は余り暑くならない上に、あまり高緯度のわりに寒くもならない。さらに空気は乾燥しており、水は貴重だ。

そういう事情で雑草も育ちにくく、森でそういうつたものに足を取られる、ぬかるみに嵌る、ということは殆ど無い。

だが、ここはパリの周辺で、今は春だ。

パリの春は気温変遷が一定ではない。

冷える可能性も、暖かくなる可能性もあるという不安定っぷりだ。

だから土郎はとうあえず、凍えるよりは寝苦しい方がマシだ、と判断した。

それに、3枚全てが使われる必要があるわけでもないのだ。

「これ、毛布替わりにしてくれ。服と別に一枚は布を羽織つておって言つても、まだ春だしな。

此処は森だからもつと冷えると思う。

今日特別冷える可能性が無いわけでもないし、3枚ぐらい必要だと思つんだが、大丈夫か？」

手渡すと、H・ヴァンジ・リンはやはりやや上の空で、

「・・・・・・ん。その、助かる・・・・・・・・・・・・」

「良し。済まないけど、俺は先に寝てしまつが構わないか？薪は今ある分で足りると思うから、使つてくれ

「・・・・・・構わん。勝手に寝る」

「ありがとう。じゃあ、お先に」

そんなやつとりの後、土郎もまた『影』から布を一枚取り出し、それに包まって胡座をかく姿勢のまま、一本の菩提樹に寄りかかって眠り始めた。

彼は彼女の迷いが晴れることを何より望んでいた。

この一晩で悩みが終わることを願つた。

彼のこれからそのためではなく、彼女のこれからそのため。

目の前の男が眠り始めたのを見て、少女は思つ。

……『氣を使ったのか。

こちらとしても、相手を目の前にして長々と待たせるといつ意識を持つのは、余りいい氣分ではない。
素直に、少し有難いと思う。

ふとそう考えた後、この男に対してある思いが強まり始める。

……ここまで優しくされたのは何時振りだつたか。

『『う』なつた後も少しは好意を受けたことがある。
だが、いつしか自分から避けるようににもなつた。
あまり他人に関わると、自分の身に何が降りかかるか分からぬ。
その他人が自分に関わって不幸になるというのも善しと思わない。
そうなつたことが一度二度あつたはずだ。

だから、誰も自分に関わるべきではないのだ。
だから・・・・・いや、でも

この男なら。

彼女の答えが固まり始める。

だが、すぐに瓦解する。

……違う。まだ、信頼できない。

信頼したい。この優しさを信じてしまいたい。縋りたい。

だがこんなもの氣の迷いだ。

自分は、

出会つたばかりの得体の知れない男に、

少し優しくされただけで、

靡くような馬鹿なお嬢様なのか？

何も知らない愚かな子供なのか？

そして一周する。

だが、この男の自分自身を評する言葉を思い出す。

騙された女の子、って感じか？しかも報われない。

……正しい。間違っていない。

この男は確かに自分の概形を一瞬で理解した。

恐らく、自分の欲しいものをくれるに違いない。

今だつてそうだ。

今現在、私はそれを受け取っている。

それでも、当てずっぽうだつたかもしれない。

魔女として狩られる女なんぞ半数がそんなものだらう。やはり、信頼に値するには弱い。弱すぎる。

思考は堂々巡りに入り始める。

そして、たつたひとつ。
最悪の渾えた判別方法を思いついた。

……記憶を覗いてしまえ。

記憶を覗けば、シロウ・ヒミヤという人間をほぼ完全に見定められるはずだ。

人間として、最も恥じるべき行為かもしない。
だが、裏返しにだ。

本心では、そこまでしてでもエヴァンジェリンは土郎を信じたかつた。

この風変わりな傭兵のくれる温もりを本物だと思ったかったのだ。

そして、後悔した。

始まりは夜から。

全てが燃える地上の地獄。
戦場ではない。略奪された街でもない。

そこでは、邪悪があつた。

黒より黒い月が浮かぶ空。

闇よりおぞましい闇を吐き出す孔。

それは、邪悪そのものだった。

闇、否、泥にに触れたものはみな、気が触れて死んだ。
炎に包まれて死んだ。

闇に喰われて死んだ。

それは、天罰などではなかつた。

記憶の中の赤毛の少年はその中を走つていた。
助けを求めるのか、誰かを求めるのか。
それは客觀では推し量れない。
ただ地獄の中を走つっていた。

炎に焼かれながら、泥に喰われながら。

次の風景。
夜明けだ。

炎の勢いは弱まり、同時に周りの生命の氣配も希薄になつていた。
少年はまだ生きていた。

生きていると分からぬ程度に死んでいたが、生きていた。
そして宛てども無く歩き出したが、少しすると仰向けて倒れた。
すでに目は死んでいる。死人の眼だ。
この少年は死んでいる。

すると、今度は男がさまよい歩いているのが見えた。

黒い背広とコートを着た男。

エヴァンジェリンには見たことのない服装だ。

その男は異国の言葉で、縋る思いで叫び続けている。

だが、その言葉の意味はエヴァンジェリンも理解できた。

「誰か・・・・・！誰か・・・・・生きている人は居ないか・・・
・・・・・！」

死んだ少年が、手を天に向かつて伸ばした。

それを認めた男が走りよる。

その手が力を失い、落ちると同時に。

掴まれた。

男はついに生存者を見つけた。

最後のささやかな望みを叶えた。

そして、男はその願いの成就を喜んだのか、心からの喜びを、その憔悴しきつた顔に浮かべた。

あまりに嬉しそうに。

少年ではない。

救われた人間が笑っているのではない。
救つた人間が笑っているのだ。

「ありがとう・・・・・・・！生きて、つ・・・・・いてくれて・・・
・・・ありがとう・・・・・・・」

まるで救われた罪人が赦しに喜ぶように、その男は笑った。
涙をこぼしながら。

成程、おそらくその男は救われたのだ。

少年はそれを呆然と見つめている。

そして、次の瞬間に少年の目に光が灯った。
蘇生したのだ。

エヴァンジェリンは恐怖した。
目に光が灯つただけだったから。
少年は蘇生した。目にも生氣が再び宿った。
だが、それだけだった。

人間の目を、していなかつた。

そしてエヴァンジェリンはさすがに気づいた。
この赤毛の少年こそが、幼き日のシロウ・ヒミヤだと。
彼女の後悔が形になり始めた。

辱・口つのオイタは許すが情け（前書き）

「辱」はめぐく、と読んでください。

あと二つものO&Aは後編扱いなのでお休みです。

辱・口つのオイタは許すが情け

3番目だ。

白い部屋。

ベッドが並ぶ一室にたくさんの子供達が寝ている。

皆、大小の違いさえあれど負傷している。

士郎もその一人であつた。

負傷はひとつ前の記憶よりも回復していくように見える。

そこに一人の男がやつてくる。

またあの黒い男だ。

彼は少年を見つけると、気の抜けたにこやかな笑みで歩み寄つてくる。

……なんだコイツは。正直、
……助けた所 胡散臭いぞ。

『さつきの』を見ていなければ私は嫌な顔をしたかも知れないな。

エヴァンジエリンはそれを見て考えながら、周りの状況も気にしていた。

記憶の再生を一旦停止して、周りを観察し始める。

……ここが黄金郷か？ジパングなのか？

確かに人々の顔立ちは歐州では見かけない。

だが、ここは 何処だ？

彼女は彼の出自を疑い始めた。

というより訳が分からなくなつた。

それもその筈だ。

」の風景は、1500年初頭の世界には存在しない。言つまでもなく、彼女は『まだ』気づいていない。

……とりあえず、進めよ。進めれば分かるかもしね。

記憶の再生が再開した。

男が士郎のベッドのとなりの椅子に座ると、話を始めた。

「ここにちは。君が士郎くん、だね？率直に聞くけど。君は、孤児院に預けられるのと初めて会つたおじさんに引き取られるの、君はどうちがいいかな」

男はそんなことを言つて、士郎の反応を伺う。

……「これは、胡散臭いな…………！それに話が早すぎやしないか？自分が見つけた生存者だったとは言つてもだ。

そうエヴァは苦笑いを浮かべ、また、訝しみ考えるが、すぐ士郎の返答がある。

「…………おじさん、俺の親戚なのか？覚えてないんだけど」

「ああ、いや、そういうわけじゃないけどね。所謂赤の他人つてやつだよ」

士郎がそう問い合わせると、気の抜けた笑みでそう答えた。

……赤の他人なのか。なら本当に、何故引き取らうと考えたのか。解せないな。

そして、選んだ。

士郎はその男に付いて行くと決めた。

「……わかった。行くよ」

「さうか、良かった。なら早く身支度を済ませよ。新しい家に、一日でも早く馴れなくっちゃいけないからね」

……決断が早いな。

まあ、それもそうだ。『生きている』だけの人間は悩む頭も無い、か。

男は荷造りを始める。

手際は悪い。

この男を不器用な人間だと断じるには十分なほどだ。
しかも

……「ん？ さっきより散らかっているような気がするのは気のせい
なのか！？ 気のせい！？」

この様だ。

そんなこんなで何とか荷物をまとめると、胡散臭い男は腰を丸めて
鞄の取っ手を取る。

そして何かを思い出したかのよつに「こんなことを言つた。

「おつと。大切なコトを言い忘れた。・・・・・ウチに来る前に、
一つだけ教えなくちゃいけないコトがある。いいかな？」

そして鞄を地面から離し、姿勢を戻して振り返りながら男は言つ。

「うん。初めて言つておくとね。僕は、
だ

そう宣つた。

……なるほど、胡散臭い。本当に胡散臭いな。

魔法使いなの

だが、士郎はそんな男の言葉に向かって、

「うわ、爺さんすごいな」

目を輝かせて言った。

……まだ、その用だ。

それは、人間の目ではない。

火を点けられたたけの蠟燭の目た

そしてようやくその男は名乗つた。

「…………うそ、よろしく」「…………うう、そうだ。僕の名前は衛宮・切嗣。よろしく、士郎くん」

……ヒミヤ・キリツグ…………？

これがジパング式の名乗りなのだろうか。

ハガクンジハリソセテウコウヒトヲ御えていた。

推察と理解の試みを続けている。

だが、分かつたことがある。

……アイシは「」の時、シロウ・ヒミヤになつたんだな。

そこで、第3の記憶は終わつた。

第4が始まる。

わたりの記憶よりそれほど時間の経っていない記憶のようだ。

切嗣と士郎は武家屋敷に住まう。

これもエヴァンジェリンにとつては非常に驚くべき光景だった。

……おお、これがジパング式の住居か…………！
靴は脱いで入るのか！初めて見たぞ！

ん？この部屋、床が木で出来ていらないな？

流石に手触りまでは読み取れんが、珍しいモノを見た。

異文化を知るということに相当興奮している様子の彼女。
好奇心は錆び付いていただけで失われては居なかつたようだ。

だが、彼女にとつて奇妙な風景が始まる。

……あの箱は何だ？

人が中で動いている。

いや、水盆や鏡に姿を映して遠くの人間と会話する魔法も有つたはずだ。

それと似たようなもの、か？

だがこれは会話をするようなモノには正直見えない。
この一人も見ているだけ、という風に見えるな。

テレビを初めて見たエヴァンジェリンだが、魔法的な観点で推察を始める。

ふつうの中世人よりも動搖が少ない、のでは無かるつか。

その後も一人の生活を見ながら、ジパングという国を知りうと試み

を続ける。

天井に吊り下がる球体から発せられる光で夜も明るい中で生活できるのを見たり、

直方体の箱に水やら食料やらが詰められているのを見たり、
やけに切れる短剣で料理をしているのを見たり、

4つの車輪が付いた箱が跋扈する道路を見たり。

魔法なら可能だろう、と考えている彼女にとつては、確かにそれは珍しいとは言つても、大きな驚きではなかつた。

だが、それは無意味。

彼女が『そのジパング』に実際にに行くためには、絶望的なまでの時間のズレ
否、彼女にとつて500年は確かに長いが絶望的でも何でもないが
がある。

彼女は未だ気づかない。

……だが、ここで気が付いた。

魔法使いをすごい、とシロウは言っていた。

恐らく、未だに魔法使い
にコソコソしているのだろう。

なら、あの生活の中で出てきた器具の近くは魔法の力で動いている
わけではないのだろう。

・・・・・ん?なら、あれらはどういうモノだというのだ?
おかしい。

ズレた。

彼女の認識とこの記憶の前提のズレが、見え始めた。

2、3年程経つてゐるのだろうか。

士郎が一人で家のことを何とか出来るようになつた頃から、切嗣はよく家を空けるようになった。

世界中を冒險してくるのだ、とか何とか。

一ヶ月いないことは当たり前、半年に一度帰つてくるといふことも有つた。

そこで、もう一人の登場人物が現れている。

藤村・大河。

近所に住むお姉さん、という奴だ。

実際は第4の記憶から出現はしていたが、第5ではさらに登場回数が増えた。

切嗣の不在があるのだろう。
寂しい思いをさせたくない、という優しさか。

……フジムラ・タイガ。いや、コチラの読みではタイガ・フジムラ

欧洲の読み方
か。姦しい女だが、うむ。悪人ではない。むしろ善人だろう。
それにも、キリッグという男は何をしていたのか。

引き取つた養子をほつぽり出してどこへ行つていたといふのか。

世界中、とは凄まじいスケールだと思うが。

・・・・・なるほど。世界中なら確かに仕方ないかもしねない
日数だ。

それくらい掛かるだろう。

記憶の基本情報によると、5年経つたらしい。

第6。

それまでに、士郎は切嗣に「魔術」を教えてくれるようにならがんだ。
切嗣は嫌々ながらもそれを教えた。
本当に、少しだけだつた。

……魔法（magic）、ではない？
魔術（magical skill）？こんなモノは見たことがない。

エヴァンジエリンは自己の認識と世界の実像のズレをはっきりと自覚し始めた。
それまでも違和感程度は感じていたものの。

今度の風景は月夜の縁側。

着流しを着た切嗣と、その隣で士郎。

二人は月を見ている。

いい月夜だ。

そして切嗣の語りが始まる。

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた」

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ」

そしてため息と苦笑いの後で言葉をさらに継ぐ。

「そんなコト、もつと早くに気が付けば良かつた
深い、哀しみが見えた。

……何を言い出すかと思えば、この男も『その類』か。

報われなかつた。理想に裏切られた。そういう男か。士郎にその哀しみが見えたのか、それは分からぬ。だが、深く考えた結果、意を得たらし。

「そつか。それじやしうがないな」

神妙な顔で、そつ言葉を掛けた。

「そつだね。本当に、しうがない」

二人はままならない世の中への哀しみを分け合つていた。

そして、切嗣は目を細めて、嬉しそうに月を眺めている。何かを喜んでいるようだ。だが

……ああ・・・・・この男は。

死ぬ。

もう、本当に間もない。

そのようにエヴァンジェリンは直感した。

彼女は死ない。永久に。

だが、死の気配に鈍感というわけではない。

殺してきた経験がある。それが死というモノの一端を教えてくれた。

声が聴こえる。

士郎の声だ。

「うん、しようがないから俺が代わりになつてやるよ」

その誓いは軽い口調だつた。

それは切嗣がやつて来た時の秘密の暴露のシーンを思い出させた。気軽に重大なことを言つてのける。

それが、さも、あまりどうということでも無いように。

少年は、光っていた。

……ああ、まだ。あの眩しさだ。

あの時見た眩しさと同じだ。

……怖い。私を、殺すのではないだろうか、と思ひへりいに。

エヴァンジョンは、そんな風に怯えた。

それとは別に、記憶の再生は続く。

「爺さんはオトナだからもう無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせりつて、爺さんの夢は俺が」

「

ちゃんと、カタチにしてやつから

そう、士郎が言つと。

ガチャン、

と、鉄の落ちる音が、した。

カン、

カン、

と、鉄を鍛つ音が聞こえ始めた。

哀しい音だ。
孤独な音だ。

エヴァンジロリンは、幻の自分の身体を抱きしめ、震えた。

「やうか。ああ 安心した」

そつこぼした衛宮・切嗣。

それが、最期の言葉だった。

安らかな死に顔だった。

「 爺さん？」

士郎は、養父が動かなくなつたのに気が付いた。

「 爺さん・・・・・・・？」

さらに気づいた。

養父が死んだと。

ついに止まつたのだと。

それでも、彼は涙を流さなかつた。

養父だった男の旅立ちを見送つた。

そう、いつものように。

当然だつた。

世界が明滅を始めた。

ノイズだ。

そして記憶の世界はぼどけた。

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救っているのだ（前書き）

合法口リ発見の巻、完！

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救えているのだ

「つー？」

突然のノイズで、エヴァンジエリンの行為は止まった。

そして、田の前には。

「……見てたのか」

そう呟いて苦笑いする衛宮・士郎。この行為に怒っている、という様子ではない。

その笑顔は、エヴァンジエリンを困惑させる燃料だった。

「・・・・・・・・」

「そこまで面白いもんじゃなかつただろ？ああ、いや面白かつたかもしけないな」

そう言って、今度は無邪気に笑った。

既に夜明けだ。

かなりスローで記憶を読んでいたせいだろう。

見ていた時間と比べて「コチラではあまり時間が経たないとは言え、だ。

エヴァンジエリンは半自失にあつた。
理由は四つ。

まず、一つ。

田の前のこの男が田覚めてしまったこと。

二〇

記憶を見る限り、間違いなくこの男は善人だったということ。今の彼を見る限り、本質を見ぬるにはこれだけで十分だった。

三

あまりに奇妙な光景はかりたつたこと

一の野が、あの辻井の二の野

特に、四つ目は彼女にショックを強く与えた。

アレが、この男なのか。

・・・・・ あんな人形の ような少年が、 今日の前にいる ハイツ なのか。
・・・・・ この男の本質は、『他者の救済』。

まるで剣だ。

『切れる』という本質しかないそれだ。

誰を救うのかも使い手次第だ。

だが、どうだ？

この男自身が『剣』なのだと

誰だ？

シロウ・ヒミヤというモノを動かしているのは、一体何なんだ？

人は、幸せになれる。
けれど、剣はどうなる？

議論の価値 あり／なし

A・あり

愛でられるのが幸せか。
使われるのが幸せか。

人間にそんなのわかりやしない。
でも、わかりたい。

それは、愛、じゃないですか？

……起きてしまったな。

久しぶりに懐かしい夢を見ていた、と思ったが……そう
いうことだったか。
まあ、仕方ないか。

衛宮・士郎は記憶を覗かれたことをついて、別段何とも思っていない。

それを「仕方がない」と許容すらしている。

……まあ、こんな胡散臭い人間を何も無しに信じられるような人間
は居ないよなあ。

つて、俺がそうだったか。爺さんと出会った時の。

あんな奇妙なこと言う大人を素直に信じてたからなあ。

「僕は魔法使いなのだ、か」

「ひつ・・・・・・！？」

「・・・・・・え？」

エヴァンジェリンは一步を下がる。

そして、バランスを崩して尻餅を付いた。

彼女はこんな態でも最強種だ。
だが、彼女は怯えていた。

まるで悪戯がバレて怒られそうな子供のようだな、と何となく考えている。

「どうか、したのか？」

士郎がそんな目の前の少女に心配そうに問いかけると、彼女はさつきの反応を恥じるように顔を顰めて彼から目を逸らした。

自分が何か悪いことをしただろうか？

士郎は困った顔で悩み始める。
だが、悩んでも仕方ない、とすぐに断じた彼は、目の前の少女に問うた。

「……俺、寝ぼけて君に何かシテたのか?もしそうなら、あの・・・・・その、ごめん!」

「どうもつ！」

頭突きを鳩尾にお見舞いされた。

エヴァンジエリンは紅顔で涙目だつた。

……俺の心に愛の必殺剣……………つて違うー。

衛宮・士郎は病人ではない。

「…………すまない」

エヴァンジエリンが謝罪すると、士郎は息を整え咳払いをし、逆に聞き返した。

「…………えーと、何がだ?あと、俺何もシテないよな?」

士郎は飽く迄彼女を気遣う。自分の事などは一一の次以下だ。

「何もされとらんわ!…………記憶を覗いたことだ。疑つて
いたとは言え、私はやつてはいけないことをしたのだから責められ
るべきだ!人の記憶を勝手に覗くなど、それは恥じるべき悪徳だ・
・・・・!」

エヴァンジエリンは自分の行いに憤怒している。愚かな行為に走つ
た自分自身を叱責している。

しかし、そんな様子も意に介さず、士郎はあつけらかんと言つ。

「ああ、そんなことだつたのか」

その反応は彼女を更に困惑させる。

「…………そんなこと、だと?」

その言葉は問いかけだ。しかし直面も向かっている。

……我なら許せないだろ?。

自分でやつておいて何だが、多分酷い目に合わせるへりこでは済ま

ないのでは無からうか。

「まあ、ちゅうと照れくさい氣はするけどな」

士郎は頬を右の人差し指で搔きながら、少し恥ずかしそうに笑う。
それだけだ。怒りはしない。

「お前は勝手に秘密を知られて何とも思わないのか！？」
逆にエヴァンジエリンは混乱を怒氣の入った口調で表す。
その問い掛けに、もはや問い掛けといつ意味は殆ど無い。

「え？ あんなものは秘密の内にも入らないと思つや～。
「な・・・・・！？」

肩透かしの回答に、エヴァンジエリンは訳が分からぬ、と混乱の極みだ。

「・・・・・俺も、正義の味方に憧れてるんだ。それは昨日から
言つてることだし、秘密でも何でもないよ。そのきっかけも見ただ
ろ？だからまあ・・・少し、恥ずかしいくらいかな？でも、今
度からはちゃんと言つてくれるか？」

記憶を読むことを咎めないと言つた。

だが自分に「許可を得てくれ」・・・・・違う。

「言つただけでいい」。それだけで良いと言つている。

エヴァンジエリンはこの事について問うのはナンセンスだった、と
悟り、そのことについてあれこれ考えるのをやめた。

そして、彼女が聞きたいのはこの一点。

まるで子供だ。

「・・・・・お前は、私を責めないのか？」

「責めないさ。別に悪いことをしたわけじゃないって、俺が言つて

るんだから

士郎はもういいじゃないか、と言つて彼女を許す。否、最初から彼女は悪くないと思つてこる。

HヴァンジHリンの心は決まった。

……ああ、私はようやく、居場所を見つけたのか。
分かった。それならば、だ。
例えコイツが亡靈のような存在だったとしても、
私は、この優しさに縋りたい。
それは贋物ではなかつたのだから

「シロウ」

彼女の迷いは消えた。

だから、名前を初めて呼んだ。

「何だ？ HヴァンジHリン」
飽く迄普通に士郎は答える。
だが、名前を呼ばれたのが少し嬉しいのかも知れない。わずかに目
が細まつてゐる。

「Hヴァ、でいい」

「へ？」

彼女の言葉に士郎は間の抜けた反応を返す。

「少し長いだろ？。呼びにくいだろ？。だからHヴァでいいと言つ
たんだ」

「シロウ、お前を雇おうと思つ」

契約は此処に成つた。

「そつか で、契約期間は如何ほどに？それが、何処まで？」

「とりあえず、私をジパングまで連れていけ。あそこには興味がある。あんな奇つ怪な光景を魅せられて興味を持たないほうがおかしい」

「ああ・・・・・やつぱり面白かったか」

士郎は何か言いにくそうな表情でそう言つ。そして、またも彼女は肩透かしにされる。

「あー、その。何というかだな。『今』のジパングには、あんなものはないよ」

「何だと？なら、あの記憶は何だといふんだ・・・・・・・・！」

そして、最も胡散臭い一言。

否、今回見せた記憶に対する違和感の殆どを解消する意外な答え。

「ゴホン・・・・・・・契約を開始するにあたつて、言っておかなくちゃならないことがあつた。

俺は 未来人なのだ

そんなことをこの男は言つた。

何時かの胡散臭い黒服の男のよつに。

は？」

当然も当然。エヴァは啞然とした。

そして、大方の疑問が「そうかー未来なら仕方ないなー、そうかー未来なのかー」と解決しつつもあつた。

「え？ あ、いや？ え！？」

だが、納得しかねてている。

時間移動という概念を初めて植えつけられたのだ。仕方がないだろう。

「ああ、ついでに言うと、異世界人なんだ」

「異世界？」

さらに、意味を理解しきれていないエヴァに、最も理解の難しい言葉が出た。

これは士郎にとつても説明が難しい。

ここは16世紀。量子論なんぞはまだ存在しない。

「『魔法』ではなく、『魔術』。俺の記憶ではそうだつただろ？」

俺の居た世界では、『魔術』が主流だ。違いと言えば

何というか、俺の世界の魔術師はその、

「・・・・・・・・」

未だエヴァは啞然としている。

だが頭脳は稼動している。理解しようともがいている。

「陰険だ」

「俺の世界において『魔法』って言つのはまだつあがいても実現できないようなことを実現するコトの総称でね。それに向かって研究を進め続けるわけだ。まあ、そんなかで魔術師同士の権力闘争やら研究を盗まれないようにしたりとか盗んだりとか。まあ、学者みたいなものだな」

「…………つまり、どうこうことだ」

結局、エヴァは土郎にまとめを頼んだ。

「俺は未来人で、恐らくこの世界の未来も大体俺の知っている通りになるはずだ。でも、俺の世界では『魔法』ではなくて『魔術』があつた。歴史に大した違いはなくとも、『裏』に大きな違いがある」

…………んー…………よく分からんなー…………
エヴァは首を傾げ、腕を組んで悩んでいる。

「まあ、仕方ないさ。じついう概念はまだこの時代には生まれていんじゃないかな？」

その様子のエヴァに土郎は言葉をかける。

「そう、仕方がない。16世紀の人間に『時間移動』『並行世界』という概念は最も縁遠い。

「で…………それでも俺を雇ってくれるか？」

改めて土郎はエヴァに言つ。

「フン。もう契約は始まつてゐるんじゃないのか？いきなり首にすりようなことはしない。それに、その…………面白そうじゃないか。決めた。お前の『魔術』の知識も寄越して貰うぞ。主の命令

だ
彼女は彼を受け入れた。

感謝は言わない。

新たな従者はこう言って答える。

「仰せのままに」

「良力ツタナ御主人」

それを、温度のない、しかし温かい目で見ている一つの人形があつた。

「チャチャゼロ。起きたのか・・・・・」

「オウ、大体ノ話ハワカツタゼ。シロウ、才前
ジャネー力」

面白イ

ケケケ、と笑つて機嫌の良さそうなチャチャゼロ。彼女も彼を受け入れることは吝かではない様子だ。

「気に入ってくれたようで何より」

士郎は笑顔で答える。

「シロウ、出発だ。約束通り、ジパングへ連れていけ」

「了解した、マスター」

「ケケケ、コレカラ宜シク頼ムゼ、シロウ」

「では、行こうか」

エヴァの号令で全てが始まった。

さあここからだ。

二人と一体が森を出る。

今日は、晴れていた。

太陽の登る方へ、彼らは行く。

彼が貴女を助ける時、貴女は彼を救えているのだ（後書き）

ギャグ要素が全くないのが続いたので少しだけ緩いところを入れてみました。

次の更新まで間があくと思われますが、気を長くしてお待ちいただけるとこれ幸い。

ねえどうするわけ?どうするわけよ? (前書き)

大旅行のルートを決めるお話です。

つまらないかも知れませんが、ご勘弁を。

ねえといつするわ子?..どうゆるわ子よ?

「さて
」

森を出て平原を歩く一行。

3人の格好は一様に同じだ。

エヴァ、土郎、チャチャゼロ。

3人ともぐすんだ肌色の布を外套として纏う形になっている。

その中身は三者三様。

土郎は黒の革鎧、黒のパンツ、そして紅い外套。あの紅い弓兵とほぼ同一だ。

エヴァはショーミーズを肌着に膝丈くらいの色あせた肌色のチュニック。足は裸足だ。

チャチャゼロは人形の黒い服。

時代的にマトモなのはエヴァ、旅支度としてマトモなのは土郎だけだ。

チャチャゼロは人形なのでその辺りはあまり関係ないだろう。

「出発するのは良いが、どういう経路なのかは分かっているのだろう?」

立ち止まって土郎にエヴァが問い合わせる。

同様に土郎も立ち止まり、振り返って答える。

「ああ、そのことなんだが

」

ヨーラシア大陸横断つて何の冗談だよ？ええじゃないか！／ヒコーキカモオン

ええじやないか！

寛平ちゃんがんばつたじやないか！ 地球一周！

- - - - -

「急いでフランスを出よう」

「曲二三の歌」の題名

士郎が最優先事項としてこの事を掌にたのは当然だ

処刑中に魔女が逃げたなどといつゝとは非常に珍しい。

たが、魔女が逃げたからと言ひて、それで神経質になるだらうが、いや、なるだらう。

さらに彼女は『裏』では賞金首だ。

……」のままフランスに居ては、まず魔術師連中に嗅ぎつけられる可能性が高い。

それなり早く教会の尖兵に嗅ぎつけられる可能性は……恐らく無い。

だが、どちらも脅威だろう。

「まず、俺達はあの事件で大いに目立つた。顔も知られた」「・・・・・燃やされて死んだ後にでも助けてくれればそういうことも無かつたんだがな、ククク」

「ソウスリヤ逃亡者テスラネカラ何ノ危険モ無ク逃ゲラレタンダケドナ、ケケケ。マア、燃ヤサレルノモ危険ナンダケドナ、普通ナラヨー。」

「んー・・・・・・・あまり意地悪を言わないでくれ・・・・・・」
士郎は少し落ち込んでいる。

後先考える余地が無かつたのは事実だし、その時にはこの少女の『事情』など知らなかつたのだ。

「すまん、まあ・・・・・・・感謝はしている」
エヴァはその「」とに気つき、謝罪し感謝する。

「ん。どういたしまして、だな。でだ、当分の間は情報はフランスだけを駆け巡るはずだから、まずこの国を出てしまえ、という感じだな」

「それには異論はない。またあのようなことになるのは少々面倒だ」「殺してでも逃げる、という状況は俺としてはあまり歓迎できないしな」

「そこまでは理解した。で、フランスを出て何処へ行くというんだ」「そこだ。そこが少し問題なんだが・・・・・・・」
「何か問題があるのか?」

そこで士郎は『魔術』で世界地図を創りだす。

「これが世界全土の地図だ。まだこの時代には無いけどな、見せてもいいか」

「・・・・・すごいな。これが、世界・・・・・・・」

「俺達は今、この辺りだ。パリの北東だな。だから・・・・・って話聞いてないな?」

「・・・・・フランスはお前の時代にも残り、オスマンは消える。・・・・・イングランドも残り・・・・・それに西の海にはインド

ではなく別の大陸があるのか・・・・・そこにも国がある・・・
・何て大きな国なんだ・・・・・

エヴァは世界の全貌を初めて見た。

彼女の好奇心は大いに刺激され、地図に夢中になつてゐる。

「ハハハ・・・・・まあ、仕方ないか」

「御主人マルデ子供ダナー。イヤ子供ナンドケドヨ、ケケケ」

「うるさいぞチャチャゼロ。シロウ、ジパングはどれだ? 遙か東と言つていたが・・・・・」

「ああ、大陸の端からさうに東の海の・・・・・そう、この島国だ」

「遠いな・・・・・どれくらい掛かるか分かるか?」

「それは俺にもちょっと分からないな・・・・・」

「ふむ・・・・・そうか・・・・・」

その後もしばらぐエヴァは地図に夢中になつていた。

士郎は微笑ましく見つめ、チャチャゼロはいつもどおりケケケと笑いながら御主人と地図を眺めていた。

「で、そろそろ良いか?」

「・・・・・ハツ! す、すまん・・・・・」

夢中になつていたと気づいたエヴァ。少し恥ずかしそうで、顔がほのかに赤い。

珍しいものを見て興奮しているのもあるのだろう。

「いや、構わないさ。で、俺達の居る場所からフランスを急いで脱出するとなるとだ。

今この国境はどのあたりだったか・・・・・まあいい。とりあえず、

この地域に入ることになる

士郎はフランスの北東の辺りを円を描くように示す。

この地図ではちょうどイッジの辺りだ。

ちなみにこの時期のフランスは現在よりも国境がオーストリアに押されていました。

それ以前の100年戦争時代はイングランドに大部分を奪われていたことを考えると凄まじい領土回復では有るのだが。

その立役者として有名なのが、かの「ジャンヌ・ダルク」である。しかし、哀れなことに彼女は異端者としてイギリスの手で魔女として処刑されたのだが。

「神聖ローマ帝国、か。この地図ではGermanyとなっているからいい気味だ・・・・・！私に言わせれば神なんぞクソ食らえだからな！」

・・・・・
オ・オ・御主人モツト言エリ チン 又野朗ケ イズトニ
・・・・・ チヤチヤゼロが煽つてゐるが、エヴァは止めてくれるだろウ・・

そう土郎が考えていたが期待は裏切られる。

「ファツ ンゴツド！ ソッタレ野郎ジー ス！」
見事に煽られた。病気だ。

見事に煽られた。病気だ。

「ホーリー イイイツ

「イイゾー御主人ーパパトママハベツドテゴロゴローホーリーイイヅト! 神はねえい!」

「頼むから止めろお

エスカレートしていく二人に士郎は大慌てだ。
メダパニだ。
混乱だ。

そしてチャチャゼロは未来を先取りしていた。

「すまん・・・・・・・・調子に乗りすぎた」

け無い

「まあ、これからはちょっと血重してくれ……」

「四三一六一ラミリ

「ナラ仕方ネエナ、ケケケ」

チヤチヤセロの煽りに止まらない

「チャチャゼロ！ お前先煽つただろうが…………！ あとガキ言

うな！」

見方圖ノ三一
中見方ノ八

歳を言うとババアババア言わることに気づいたエヴァはガキに対し
して反応しないと決めた。

それを読みきつたチヤチヤせ田は更に方向を変えて煽る。

「お、お、おお、貴様あ
！」

「二人ともやめんかあ！」

土郎の叫びが今一度響いた。

「…………とにかく、その地域に入ることになるな。問題

はその次だ
カトリック圈から拡げるへきた
土郎は咳払いをし、仕切り直す。

「すまん・・・・・・」

エヴァはバツの悪そうな顔だ。

チャチャチャゼロはケケケ、と笑つてビビ吹く風だ。反省の色は見えない。

恐らくまたやるだらう。

「…………だが、別に長く滞在するわけじゃないんだからその辺りは気にする必要は無いと思つが？」

エヴァの質問が始まる。

「この世界じゃどうだか知らないけど、俺の世界では異端狩り部隊があつたんだよ…………化物狩りの化物集団だ」

士郎は自分の経験を思い出す。士郎を追う連中その2だつたからだ。

「こいつでもその類の連中がいると正直マズイ、と？」

「そうだ。嗅ぎつけられると大事になるんじゃないか、ってことだ」「ふむ…………教会にも魔術師はいたはずだつたな。成程、確かに嗅ぎつけられるのはマズいな」

エヴァは記憶を探つてその事を確認し、士郎の言つこと尤もだ、と意を得る。

「こいつでは教会も魔法の行使は認められているのか？俺のところでは使う奴は異端視されたんだが」

士郎も自身の記憶を掘り返す。否、これは掘り返すまでもなく危機意識が働いているだけか。

「所変われば、というやつか？そういうことは無かつたと思つぞ。」

「実際は同じ『場所』なんだけどな、可笑しなことに。そつか…………なら尚更近づきたくないな、特にバチカンには。そういう異端狩りの本拠というイメージがあるしな…………」

士郎は遙か南東の方向を見て言つ。

ここからは直線距離で1000km以上、さらにアルプスの山々を隔ててはいるが、今の彼らにとっては恐るべき存在だ。

「そうだな。 それでも近づくのは「ゴメン」だが」
エヴァも苦笑いだ。 だが嫌惡の色も見て取れる。

流石に自分を殺すような連中に好意など抱けるはずもない。
例外も多々あるのだが・・・・・・

「ケケケ、ジユーダス・プリースト様様、ダゼー」

またチャチャゼロの悪い癖が始まった。

士郎はすぐに止めにかかるが・・・・・・

「チャチャゼロ・・・・・・もう止めてくれないか・・・・・・

ほら、エヴァも」

「私もそれには同意するぞチャチャゼロ！ よくしてくれたユダ！」

エヴァは両手を握りこぶしにして振り上げて興奮している。
彼女も病氣だつた。

士郎は絶望気味だ。

「だからマズいって！ 自重しろ！ 一人とも！」

ちなみに実際にはユダは実行犯ではない。

キリストを裏切り、ユダヤ教の連中にチクッただけである。
まあそれでも重大ではあるのだが。

「またやってしまった・・・・・・」

エヴァは膝と手を地面に付けて落ち込んでいる。
顔もうつむいており、表情は非常に暗い。

「御主人モ成長シネーナー。 マルデガキダナ。 否、ガキダッタナ。
ケケケ」

「またガキガキ言つ・・・・・・！ 畜生、従者のくせに・・・・・・
・・！」

歯をギリギリならして憤慨するエヴァ。

それでは子供の癪癩にしか見えない。

しかも結局さつきの決意も無駄にガキと言われて反応している。

「で、東方正教圏へ脱出、その後すぐヒオスマン帝国、つまりイスラム圏へ入りたいと思つ。異論や質問はないか？」

もう士郎は放置する方針のようだ。

「人ともどうせ話を聞くだらう。最終的には。

「というより、私はよく知らんからな、大体全部お前に任せらるしかない・・・・・・」

エヴァンジエリンは、ため息を付いてい。

自分にはどうしようもない、ということは分かつてゐるが、それに少し無力感を感じてゐる。

「じゃあ、任せてくれるか？」

士郎は頼もしい笑みと共に答えを聞く。

「ああ、任せる」

「ありがとう、エヴァ。オスマンから先は着いてから決めるか？」

「そうだな、それまでに色々話を聞かせてもらつつもりだから、それで決めよう」

こうやつて当面の目的地・経路が決まった。だが、まだ話は続く。

「よし、ルートが決まったのはいいとして、だ。

一応姿を変えて行くべきだと思うんだが・・・・・・幻術は使えるか？」

そう士郎が問い合わせるが、逆に質問で返される。

「いや、それより・・・・・もつとも前、地図をピリカり出した?」

「ああ、それか。『魔術』だ。俺が得意なのはああいつ類のことだけだ、へっぽこだし」

「・・・・・これ、何処に有つたものを『取り寄せ』たんだ?」

「いや、『作つた』。『グラディ・ション・ニア投影』つて魔術だ」

「『作つた』・・・・・じゃあ、すぐ消えるものなの?それにしては存在感が濃い気がするが・・・・・」

エヴァンジェリンは手に持つていた地図の感触・存在感を確かめている。

彼女には『本物』にしか見えないのだ。

「いや、消えない。俺が消すまでは残る。そういうものだ」「・・・・・・・なんだと!?そんな魔法は聞いたことが・・・・・

・『魔術』だから仕方が無いか、ふむ・・・・・・

エヴァは一旦驚くが、『魔術』と『魔法』にも違いがあるのだろう、と取り敢えず落ち着く。

「いや、本来ならエヴァの言つたとおり消えるものなんだ。でも俺は異端でね。消えないモノを作れる。それで多方面から追われてたわけなんだが・・・・・・」

士郎が自らの過去の一端を話す。

それはまだエヴァが『見て』いない部分だ。

「・・・・・シロウ、それは誰にも見せるなよ。こいつりでも異端中の異端だ。普通の教会の連中にも、異端狩りの連中にも、魔法使いにも見られてはならない

エヴァの顔が険しくなる。

士郎のそれは『こいつ』でも異端に入る。

こちらの魔法でモノが生きなり現れるようなモノは2つ程度だ。

『物質^{アボーツ}引き寄せ』と『アーティファクト』だ。

どちらも一から作るのではなく、ただの転送にすぎない。

『普通の投影』程度なら只の幻術で同じようなことが出来るだらう。だが、『衛宮・士郎の投影』は「有り得ない」と切り捨てられるほどの異常だ。

「それは痛いほど分かっている。でも、どうしていつも使つてリリモモツヒリには使つてもらつて時には使つてもらひだ」

士郎の表情は変わらない。

だが以前の経験から流石に学習しているようで、そう簡単に使つてもらひはないようだ。

「…………こんなナリでも私は強い。そういう危機的状況にはならんだろう。お前の武器もそれで用意しているようだな？」エヴァンジェリンは最強種であり、今は戦う術も身に付いている。だから賞金首にもなつたわけなのだ。

「ああ、高張らないしな」

「作つておいて『影』に入れておけ。それか影に手を突つ込んで取り出す振りをして『投影』しろ。いや、それか『^{アテアツト}来たれ』と詠唱して取り出せばアーティファクトだと思つてくれるか…………」

「そういう方法もあるよな…………そう言つながらじつじよつ。バレないほうがバレることの何倍もマシだよな」士郎は宙を見て少し考える。

士郎自身もあまり考えていなかつたようだ。やはり学習していない。

「よし。というわけで魔術についても追々教えてもらつぞ。拒否権はない。拒否すれば首だ」

エヴァは親指で首を切るジェスチャーをして「わるもの」の笑みを士郎に向ける。

「これは手厳しい。まあ、俺としては教えても構わないとと思つ。信
用してくるからな」

対して彼は芝居めかした口調で返す。

そしてまたしてもあつさりそんな事を言つた。

「あつさり言うな・・・・・・私はワルモノだぞ？それでもか？」
「ワルモノも何も、俺には君は、そういう秘密を言いふらしたりす
る子には見えない。あと、自分を『ワルモノ』と断じる人間には碌
でも無い人間は居なかつたと思う。むしろ、好意すら持てた」
……まあ、例外も居なかつたわけではないんだけどな・・・・・！
それは例外中の例外である。

「・・・・・で、私にも好感が持てる、と？」

エヴァの顔が赤い。好意を向けられているような感覚がかなりこそ
ばゆいようだ。

「ああ、こんなに可愛い娘が外道の筈がな」
だが、士郎は口下手で、朴念仁で、馬鹿だ。
なぜその言い方を選んだ。

「やはり病人か貴様あ

「げつしゅ！」

鳩尾にパンチを食らつた士郎。

薄れ行く意識の中で思考するのは

……ああ、そういうれば人は見た目によらないつて・・・・・・

《衛宮くん、それ誰に言つてるのかしら？ねえ？》

ありえない、幻を見た。

あかい・・・・・あかいあくまだつ・・・・・
士郎は泡を吹いて倒れた。

復活するなり士郎はエヴァに謝罪する。

「お前はアホか！？いや病人だ！」

お前は「アホか!」? いや病人だ!」

……やはり病人なのか!? 病人たったのか!? …… 蓬生見
る目が無かつたか・・・・・ ! だが中々面白いのも事実で・・・・

•
•
!

「ケケケ、御主人。クビースルカ、コイツ？」

「だがせつかく見つけた新しいオモチャだ・・・・・・手放すには惜しいククク！」

病人元モカ?

「それは矯正すれば良かろう!」

「前回ニ一ノハシアリテ、日卯三ノハシアリ」

「ハドウスンダヨ」

たが、再び自信を失い考へこむ
件の人間の意志なぞどうで毛いいと言わんばかりだ。

「物語の世界」

「俺が病人なのはもう疑いがなきの�・・・・・・・・!」

?

「正直一言工ヨ病人、クケケケケケケ！」

「だから病人って言うなあ

!

結局幻術によつて姿を変えることには成つた。

エヴァは自分の成長した姿の想像図に変身する。
美しいブロンドの青眼の女性だ。

だが士郎は

「その・・・・・・まだ幻術魔法は覚えていなくてな・・・・・・
・教えてくれると助かる」

「・・・・・・はあ・・・・・・」

「本当ニ一ヶッポコダナコイツ・・・・・・・・」

結局、その日の晩から幻術のレクチャーが始まった。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 前編（前書き）

篇魔法について捏造設定というか推測設定がありますお。
何か自分で考えて違和感を感じるのですが、キニスンナという
方向で Go Ahead !

最も美しき広場の街・ブリュッセル 前編

最初の潜伏地であつた森を出て3日。

彼らはハプスブルグ家領、つまり広義での神聖ローマ帝国へ入つた。晴れてフランスを脱出することに成功した。

その成功の理由としては、まず移動速度がある。

この時代の道路は舗装されていない。

非常に歩きにくいのだ。

夏は埃だらけで、冬は泥だらけ。

底なし沼が存在することもあり、それに嵌つて死ぬ人間も居ないわけではなかつたと言つ。

しかし彼らは只の人ではない。

二人と一体は魔法使いとその人形である。

もつと言えば、一人は最強種・吸血鬼の真祖、もう一人は熟練した傭兵である。

人形は真祖の溢れんばかりの魔力で駆動しており、浮遊しながら移動している。

道路事情もなんのその、である。道無き道すら彼らにとつては道だ。彼らは時には空を飛び、時には地を駆け抜けた。

そう、彼らはほぼ直線で進んだのだ。

そりや速いわ。

ちなみに空を飛ぶとき、士郎はエヴァの箒の後ろに乗つていた。

大丈夫！エヴァは幻術使つてたから！大人だったから！お似合い！

ところで、士郎の幻術習得は未だ成らず。

ちなみに、実は古代ローマの時代のほうが舗装されており、一日100kmの行軍すら可能だつたという。

すげー。
ローマすげー。

更に、彼らは道無き道を行くことで徴税を徹底的に避けた。一人とも今まで同じ事をしていたのだが。

土郎は『裏』関連も引き受けた傭兵だつた。

『表』では強盗騎士・山賊・野盗を狩る、つまり悪人退治などを主に受けた。

『裏』、とはつまるといひ魔法関連だ。

魔法関連の荒事としては化物狩りもしくは『悪の』魔法使い討伐そして土郎は『裏』の仕事の利益率が非常に高い。

ある。

この並行世界に遠坂・凜の手で飛ばされる時、アヴァロンと一緒に飲まれた宝石があった。

武器情報が大量に流れ込んだのだ。

全く都合のいいことに、その中には対魔術
否、此處では魔法
「魔術、封魔状とも書く魔も名ミルハニ。

それで仕事の遂行 자체はそれで非常に扱るわけだ。

ゼロ。

士郎自身も仕事に熱心な人間なので、受ける・こなす依頼も増え、

一財産、とまで言えるほどの蓄えはあった。

それに、彼自身は無欲だ。

亡き養父の遺産にあまり手を付けず、高校生の頃からバイトで生活費を賄っていた時の癖だろう。

彼の楽しめる娯楽も無いため、必要なのは食費のみだった。

その食費すらも質素な食事のため、そこまでからない。

パリ北東の森の中で、エヴァに差し出したような食料で毎日を過ごしていたのだ。

それに加えて野菜もあるが。

そして、彼の数少ない趣味である料理をする機会は残念ながら無かつた。

話を士郎の持金のことに戻そう。

それでも長旅なのだ。

あまり無駄遣いをするわけには行かなかつた。

そして金に困つたとしても、盗みなどは以ての外だ。

彼らの矜持に完全に反する。

ただ、士郎としては旅の同行人が居ることは嫌ではない。
むしろこの賑やかさは好ましかつた。

懐かしいあの頃を思い出す、と言つたところだ。

支出はある頃までに至らないだろうが。

現在、彼らはブリュッセル周辺。

もう一晩あれば到着、といった所だろうか。

ところがだ。

纂でずっと移動するならば、一日でブリュッセルに到着する?

それは否。それは間違いだ。少なくとも1500年代初期では。

この時期、魔法による飛行術はまだ完全には洗練されていない。
2003年頃の飛行術よりは速度が出ない上に魔力消費も大きいのだ。

そして、人里の上空を行くためには高高度を飛行する必要がある。
そうすれば確かに距離を徒步より大きく稼げる。だが、それには問題がある。

マナとは大気に満ちる力だ。そして精霊の力である。
つまり、空気の薄く、精霊の存在の少ない場所では必然的に大気中のマナは少なくなる。

この場合は高高度上空がそれに該当する。

魔力効率・速度共に洗練されているとは言えないこの時代の飛行術。
人里の上を飛ぶことは出来ず、さらに、幾らエヴァンジェリンと言えどもマナの薄い高高度を長時間飛び続けることは相当の消費となる。

その上新しく増えた同行人が箒に同乗しているのだ。

そのため、箒は専ら通常の方法で通行不可能な場所を通る時に使用されていた。

此処はブリュッセルから南西の森。

やはり森は身を隠すのに適しているのだ。

彼らが寝床として選ぶのは必然だった。

本日も食事が始まる前と終わつた後に魔法の練習が始まる。

今回も同様、二人と一体は森の少々深い中の少し開けた場所で座っている。

薪は集められており、既に消費が始まっている。

4月頃のブリュッセル周辺の最高気温は15℃を下り、最低気温は5℃に及ばない。

更に例によつて森の中である。

寒つ！

現在の時間帯はまだ日が沈んでいない頃、西の空が茜色になつてゐる頃だ。

まだ最低にまで落ち込むことはないが、すでに肌寒い程に気温が低い。

「で、だ」

「・・・・・はい」

「ケケケ」

一人の男が、ブロンンドの美しい少女に睨まれていた。

「・・・・・お前、基本魔法はどうした？」

「戦闘に必要ないかなー、と思って無視してました・・・・・」

「・・・・・はあ」

一人のパツキン美口リが、でかい男に対して溜息を吐いた。

「いいか？基本魔法は本当に『基本』だ。精靈に力を借りる行為の初歩の初歩だ。私達魔術師の出発点はそこだ」

「・・・・・はい」

「まあお前は傭兵だ。いや、今や元、が付くな。兎も角必要なスキルだけを選んで習得する。これは戦闘者としては確かに正しい、が。が！」

一人の青年が、とある金髪美少女に怒鳴られる寸前だ。

「がだ！これから幻術を教えようといつのに基本魔法から叩きこみ直すとはどういうことだ！」

「御主人、昨日一昨日ト同ジ事言ツテテ飽キネーノナ」

「黙れチャチャゼロ！」

「へいへい

ほー

へいへい

ポオオオオオオオオウ！

口一つ娘に口リコソ怒鳴られた。
ざまあ。

タベの食事はまだだ。
そんな雰囲気ではない。

「で、出来る基本的な魔法は、点火とその他4種類ぐらい・・・・・
・だつたな」

「ああ、点火と発光、物体を動かす精霊、未来予測の精霊、ソレと
翻訳だけだ」

「本当に初歩の初歩の、しかもこれだけで他をよく覚えられたもの
だ・・・・・で、翻訳は傭兵業のためか」

「『あちら』がメインの傭兵だから転々としてたんで、翻訳はな。
無くても話せるには話せるんだが、それは俺のいた時代の言葉だし・
・・・・・

それと、『影』の倉庫は無理やり作つたからな・・・・・・・・

「時代交われば言葉も変わる・・・・・・か。で、覚える順番が非
常におかしいんだが、まあこの際どうでもいい！

とりあえず、幻術を覚えるまでは私の持つている『コレ』も使つぞ
そう言つてエヴァは自分の『影』からとある球体を取り出す。
サイズは直径約30㌢。

端から見れば、それはビンの中の箱庭。
中には海に浮かぶ島が入つてゐる。

「ダイオラマ魔法球…………だつたか？超高级品だろう？」
士郎はその物体の特徴を聞いたことがあり、その名前に思い至った。

「これは私の自作だ。流石にうまいといふとたまにせういう物も欲しくなるんだ」

「自作で……漫した中に異界を内包しているわけだよな……」

自分の心が何でないことはないでいる二、三の方がそれはそれは
もう、その・・・・・
バカだな！

「ああ、しかもこいつは時間差24倍。中で一昼夜過ごしても外では一時間と言つたところだ。まあ、中で一日経つまでは出られない

仕様たが和達には關係なしで、

「荒てゐな。どうあえず、今晩はまだ使つな」。幾つ私達が当面の
「せ不老不死たか」なじやあ早速この中で修行するのか?」

危険を脱しているとは言え、余りに無防備だ。チャチャゼロを置いていつても魔力を供給できん。そうだな……明日くらいには大きな街に着くはずだな？ 落ち着ける宿を見つけてそこで使おう」「ああ、ハップスブルグ家領・ブリュッセルだ」

彼らは一体何処へと歩く？

自由回答

A・前へ。時は無情にして無常である。
君の向いている方向へただ進め。

そして、その晩の魔法講座、食事が終わり就寝となつた。

食事の内容は黒パン、豚肉の塩漬けのロースト（投影によつて鉄串などを用意できたためそれで焼いた）

乾燥した豆類。それと少しの水。

豚肉の塩漬けは塩抜きをしていないので非常にくどい味だつた。

僅かな水では酷く喉が乾いてしまう、というのがやはり反省点だつた。

今回もエヴァの布は3枚。

士郎も今回は2枚引つ張り出してくるまつていた。

幾らフランスから出たとは言え流石に見張りが必要だらう、ということでチャチャゼロは寝ずの番をしている。

彼女はエヴァの『影』の中に入っていることも出来るのであまり問題はなかつた。

神聖ローマ帝国。

その前身はフランク王国と云つ、ドイツ・フランス・イタリア・ベネルクス3国を統一していたゲルマン系の国家だ。

そのフランク王国の王であり、ローマ教皇からローマ皇帝の帝冠を授かつたのが、カール大帝である。

カール大帝の握つた領地は、西は現在のフランス全土、東はボヘミア、北はニーデルラント、南はローマへと及ぶ。全く以つて広大である。

しかし887年以降。

王国は東・中・西と分割。

その間もなく中フランクは東西、イタリア王国に分割吸収されて消滅。

その後には王家の家系が消滅。フランク王国は消え去る。

西フランクは王家の家系消滅によつて縁戚関係にあつた他の家系が継承。

フランス王国となつた。

そして最終的に神聖ローマ帝国となるのは東フランクである。

神聖ローマ帝国成立のきっかけはカール大帝のローマ皇帝戴冠。

東ローマ帝国の立場としては、「ローマ帝国の皇帝は一人だけである」、つまり東ローマ帝国の皇帝こそがローマ帝国の皇帝である、という立場だつたのだ。

実際の所、東ローマ帝国の見解としては、

「カール大帝はフランクの皇帝である。が、ローマ皇帝ではない」とこつものだつた。

だが、カール大帝の皇帝即位には画期的な意味があつた。

ヨーロッパに皇帝が一人、という状況は西ヨーロッパの景気付けに成つた。

どういう事かといふと、東ローマ帝国の力からの独立を、皇帝擁立ということで示したということだ。

そして、その160年後のオットー一世の戴冠によつて所謂神聖ローマ帝国が成立することになる。

神聖ローマ帝国の名前は3度も変わっている。

最初はローマ帝国だったのが、神聖帝国、神聖ローマ帝国、ドイツ人の神聖ローマ帝国へ。

一度目の変更は11世紀、100年で再び、さらに100年でまた変わり、1512年に最終形に落ち着いた。

二人がフランスを出て入ったのは神聖ローマ帝国、もう数年で国号が変わる頃、と言った時であった。

その次の日の昼前に一人はブリュッセルに到着した。

「ユーロがブリュッセルか・・・・・・・・・・世界で最も美しい広場があるらしいな！」

とお上りさんなのはどちらか？

「シロウ、私も30年ほど前にここを拠点にしたこともあったが建物が随分増えているな！」

どちらもでした。

「一人トモガキカヨ」

一体冷めていました。

「・・・・・・・・まあ、先ずは落ち着ける宿を探そうか
「贅沢を言つつもりはないが、マシな宿で頼むぞ」

先ずは宿探しである。

大きな街だけあって宿は少なくはない。

少なくはないのだが・・・・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・空室無し、か！」

「すまん・・・・・・」

「いや謝る必要はなくてだな」

人が多いということは利用者も多いということだ。

マシな宿を見つける頃には既に宿過ぎ。
宿から食事が出来る時間も過ぎており、市場の露天で食事を探すこと
になった。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 前編（後書き）

今回は説明ばっかです。

とりあえずそれなりの量が書けたので投稿です。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編（前書き）

ミナサン、オヒサシブコートス

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編

ブリュッセル。

現ベルギーの首都である。

12世紀頃から交易・交通の中継点として重視され、手工業・商業が発展した町である。

ここで職人と商人は成長していき、貴族たちは要塞・城塞を築き、土地の所有権を宣言したりしていた。

そして、神聖ローマ帝国の一部であるブラバント公国領主の「お墨付き」を得ることで

14世紀前半から更に経済的に成長していくことになる。

14世紀後半では領主の面殿が移されたり、1430年にはブルゴーニュ公国の支配下に置かれたり。

二人がこの街に訪れたころのブリュッセルはハップスブルグ家領。

ハップスブルグ家といつのはカエサルの末裔を自称する貴族家系であり、結婚政策によって領土を拡大してきた一族である。

コレについてはまた後田。

ブリュッセルで最も有名なのはやはり、『グラン=プラス』。

簡単に言えば広場である。

だが広場と侮るなかれ。

どつかのおバカがこれを書いている2011年現在ではとっくに世界遺産になっている。

『世界一美しい広場』として讃れ高い。

だがどつかのおバカは調べて初めて知った。

雑学もとい本当にムダな知識しか取り柄が無い癖に。

話を戻そう。

ブリュッセルの街並みの美しさは『小パリ』と称されるほどである。その中でも一際グラン＝プラスが美しい、ということで登録されたのだとか。

さらにグラン＝プラスの中で有名なのは

「……デカイな」

「ああ、久し振りに見たが……やはりデカイな」

市庁舎。50年強の年月を掛けて建造されたゴシック建築。高層建築である尖塔が、ブリュッセルの曇天を貫く。

「高さは大体……100ヤードと少しつて所か。ん……
・頂上の鐘堂には天使の像が据えられてるな」

100ヤードは大体93メートル。

ちなみに正確な市庁舎の高さは96mだ。

「ん……天使、か。此処は確か……ミカエルじゃ

なかつたか？ここの守護天使らしい」

「成程。一番高いところから見守つて貰うという構図にして加護を得たい、つてところか」

「それにしてよく見えるものだな。人間の身体で」

「コイツは本当に何というか、才能なんだ。段々育つてきたのも確かになんだが」

「視力が育つ…………？何だそれは」

「まあ、そのだな。俺の髪の毛と肌、今はこうだけどさ、『昔』と違うだろ？その過程で目も段々魔術的に改造してたりとかでな。俺

は弓使いだからな

アーチャー

士郎の眼は元々非常に優れた視力を誇っていた。

倫敦へ遠坂・凜と共に魔術を学んでいた頃、『この後』の為に眼を魔術で改造していた。

その結果として、聖杯戦争当時のアーチャーのパラメータに及ぶ程の視力を手に入れた。

つまり、4km先の橋のタイルが見えるというアレを再現することが可能だ。

「…………そう言えれば、確かに弓使いだつたな。私を助けた時は弓を使つていたな」

「自分で言うのも何だけど、アレだけは俺の『最強』だよ。それ以外は…………一流だけどな」

士郎唯一の『超一流』、それが弓射である。

百発百中の神業。

それ以外は一流だ、と自分を笑う表情に暗い色はない。ただ、どうしようもないことだ、と諦めている。

「まあ、空中で矢を番えて3点を完璧に狙い打つて磔を解くなどといつ離れ業、絶技以外の何でもないな。あんなモノを見たのは生まれて初めてだ。現在、この歐州でお前が最高の弓取りだらうな」

実際、溜め撃ちただけで矢をマッハ1.1ズドン出来る人間なんぞ居ない。

既に『この士郎』も可能なことだが、魔法も併用すれば、矢と弓が耐えられる限りは更に威力は上がるだろつ。

「そう言えれば、この建物。左右対称じゃないな、よく見ると
「ああ、そう言えばそうだな。形はほぼ同じなんだがな」

左右対称であれば、尖塔に対して線対称の形のはずなのだが、この建物。

正面から対して見ると、左半の方が1・5倍強ほど大きいのだ。
無論、高さは同じなので、横幅が大きいといつことになる。

「何でなんだろうな」

「知らん。まあ、どうでもいいことだがな。それにしてもまあ・・・

・・莊厳なものだ」

同時に建てられたわけではないから、というのが通説であり、恐らく正しいと言われている。

伝説として、設計ミスに気づいた建築家が塔の頂上から身投げした、
と言つ話があるのだが、こちらは作り話である。

「それより、食事だが・・・・・露店で食べられるものなんてた
かが知れてると思うぞ?」

「それは仕方ないだろう。取り敢えず行こう」

二人は市庁舎の前を離れ、食事を探しに行く。

「うーん・・・・・やつぱりパンを買いに行こうか。食料も補給
しておいたほうがいいしな」

「宿も取れたし魔法球が使えるからな。その分大量に買う必要があ
るが、金は大丈夫か?」

「ああ、それは心配ないよ。蓄えは十分にある。無駄遣いできるほ
どではないけどな」

結局それ以外に田舎らしい物が無かつたため、パンを買いに行くことになる。

今日は4月の半ばだ。もつ少し前であればムール貝が食べられたのだが、このことは一人とも残念に思つてゐる。

ベルギーといえばムール貝なのだ。

ちなみに、この時代に於いてのパンの消費量は一人あたり約1kg。ヨーロッパ全域でこの値に近似である。

ところで、ギルドとパンの関係について説明せねばなるまい。

ブリュッセルの誇る広場、『グラン=プラス』。

ここにはギルドハウスが何棟も建つてゐる。

元々ブリュッセルという都市そのものが交易・手工業で栄えた都市であり、この都市にギルドが多く集まるのは必然である。

ギルドといふものは、商人の手によるものが先に出来てゐた。都市の運営に貢献したとされる、遠方の大聖人が組織したものである。

これらが都市の政治を独占していたわけなのだが、それに対しても反発が起つるのは当然である。

では、何者が反発したのか？

手工業者だ。

彼らは職業ごとにギルドを結成、市政への参加を要求した。

この両集団の闘争はツンフト闘争と称されている。

尚、この後彼らの要求は叶い、手工業者達も市政へ参加していくことになる。

だが、ギルドに参加できるのは徒弟制度に於ける親方のみであった。
その下につく職人・徒弟は参加できない。

ギルドの役目は多々ある。

製品の品質維持を第一目的とし、ギルド内では規格と価格が定められた。

このことで起きるのは自由競争の排除。

同一規格・同一品質・同一価格。

これでは競争の起きるはずもない。

ギルド構成員は共存共栄が可能であつたし、市場への供給も安定した。

だが、これを良しとしない考え方もある。

自由競争がない、というのは良くも悪くもあるのだ。

各個人の自由な経済活動を阻害している。

安土桃山時代の日本でも同様の事態が起きていた。

それに対する一つの回答が、『樂市樂座』。

簡単にいえば、ギルド解体である。

これにより自由競争を誘導、商人を城下に集めるという意図があつた。

もちろん欠点も有つたが、確かにこれは画期的ではあった。

次はパンだ。

先述した通り、パンというものはヨーロッパ全域で重要な食物であった。

パン職人ギルドもギルド黎明期のうちに成立していた。

それに伴い、値段を安定させるための法律も施行された。

パンの供給を安定させるため、パン職人を牽制するためだろう。

ギルドは価格を据え置く。それを高く据え置かれては困る。

一人がやつてきたのはとあるパン屋だ。

この時代のパン屋は窓口が販売所となつていてる。

せり出した台の上に、サンプルの「とくパン」が乗つていてるのだ。

フード付きのくすんだ白の外套を纏つたブロンズの女と肌の黒い男がそこにやつて来た。

男は大きな袋を2つも携えている。

店番の丁稚は考察を始める。

……旅人かな？いや、でもこの袋だと……旅の商人かな？荷物が大きいからきっと馬車でも使つてるのかな。流石に歩きの旅ではこれを持ち運ぶだけで相当だからなあ。

その袋はそれほどまでに大きいのだ。

例を挙げてサイズを問うと、丸々と太った豚が入つてまだ余りがある程なのだ。

……一体どこまで行く人達なんだろう。

まあ、いいや。どうせ今日も明日も店番の生活だものな。

男がやつてくる。

そして、窓口の直径8インチほどのパンを指さし、

「すまない、この大きさのパンを5ダース貰えないだらうか

「！？・・・・・はい！」

……袋からもう分かつてたことだけ、5ダースか・・・・・・・・・・！

他の人に売れなくなる程に買う人だな・・・・・・！

「……ちよつと待つてください、少し多すぎるるので親方に聞いてきます」

「ああ、構わない」

そう言つて少年は窓口を離れ、親方を呼ぶ。

親方こそが、このパン屋の主だ。

是非を問わねばなるまい、と少年は考えた。

「親方！馬鹿買ひの男が！」

「40秒待ちな！」

親方の自問が始まる。

商いの魂、職人の心意気が自己を映す合わせ鏡に映る。
どちらが眞の姿なのか、この男は測りかねている。

……今日の分は既に4分の3を焼き終わつていて。
朝に二回、昼に二回。

先ほど昼の第一回が終わつたところだ。

品物はある。

この客には焼きたてを提供できるだらう。

しかし、どうなのだ、と親方は更に考える。

……我々パン職人の本懐は、「多くの人々」にパンを提供すること
だ。

出来るなら、ウチのパンを食べてもらいたい。

この男は、焼きたてのパンを全て売つてやれるほどの男なのか？

この焼きたてを食べるはずだつた十数人の人間に匹敵する一人なの
か？

確かに、商売上非常に旨い話ではある。
所謂大口の注文だ。

そこでだ。

自分はパン職人だろうか、商人だろうか？

・・・・・これを、この男に問うとしよう！

親方は3枚目の鏡の前に立つ。

その奇妙な男こそ、自分の姿を真に映すに違いあるまい、と。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 中編（後書き）

何だこのドラマ。

プロットに無いぞ……！？

パンのサイズを10インチから8インチに修正しました。
理由は「デカすぎね？」という単純なものです。

実際こんなどんなサイズだったか分かればまた修正するかも知れません。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編予告（前書き）

今回は長くかかるはずなので、予告で `wkfk` していただければ、
と思います。

傍迷惑かも知れないので一応予告、といつ形で置きます。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編予告

男と親方が向かい合つ。

最初の言葉は親方から放たれた。

「 いらっしゃい

言葉は威圧だ。

仮にも親方だ。

数々の徒弟・職人を束ねるこのパン屋の長である。
威なきリーダーは抱える手も、短く、細く、弱い。
この親方はその真逆とも言えるだろう。

「済まないな、このサイズのパンを 5ダース買いたい」

笑顔は威圧だ。

やはりこの男は戦人。

生において不敗を誇る剣の丘の主である。

力なき信念、信念なき力、この男が持つものはそうではない。
信念を以つて振るわれる力、得難いそれを持つ。

交渉が、始まつた。

生きることと信念を通すこと

どちらが大事?

前者／後者

A お前の生き方に訊け。あるいは両方。

衛宮・士郎は大混乱していた。

威圧してきたから威圧し返したけど何が起きてるんだ！？あれか！？買い占め止めろって！？

この男は戦人だ。

ホーリー・エイズを心得てしないにすかなし
そしてこの男。

そしてこの男

混舌ある № 項の其隣で す

……しかし、この親方。じぢりが別の店に行くと言つても止めるだ
ら。こんな空氣だしな・・・・・!

どうしたものか、と男は勝算を練り始める。

やはり混乱していた。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルもまた混乱していた。

……何で鬭争の空氣なんだ！？パンだぞ！？されどパンだが、たかがパンだぞ！？

この魔女もまた100年を超える年の功を持つ。

当然その混乱をおぐびにも出さない。

否、フードがそれを隠しているのも勘定に入れねばならない。

フードが無かつたならば、彼女の混乱を悟る人間もいたかも知れない。

とは言え、悟れる人間が居たらソイツはきっと本人も知らないホク口を知つてゐるに違いない。

……ここで1ダースか2ダースか買つて他の店でもまた買えぱいいんじやないのか・・・・・・?

この女は漢というのをまだ知らない。
あと、100年間きつとずつとヴァージン。

だが残念ながら、3人の中で一番冷静だったのは間違いなく彼女だ。

密かに混乱する一人に対称、親方は意氣込んでいた。

……この男、出来る!なりぱきつと自分の問い合わせに答えるだらう!

この親方、いかつい。

笑顔がどうしても怖くなる。

若いときはそうでもなかつたのだが、半端に歳を取るとどうしても
そうなる。

ここ数年、髪面で通しているのも有るだらう。
だが、この髪も気に入つてゐるのだ。

……この男・・・・・恐らく漢だ。流石に他の店に行くななどとい
うことはしないだらう!

やはりパン屋、職業上で人を見る回数が多い。

徒弟時代、職人時代、そして現在。

親方にまで上り詰めた人生経験はダテじゃない。

それと大きく外れてチヤチヤゼロ。

彼女はエヴァの影の中で既に起きていた。

……どうしてそういう空氣になんだよ…………」二つ目は馬鹿なんじゃねえの？

御主人もどうか馬鹿だし・・・・・

予習問題

一人のためのパンと、沢山の誰かのためのパン

どちらが尊い？

A · (解答せよ)

では、そのうちまた会いましょう！

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編（前書き）

最初の部分は予告と同一でござる。
ご了承なされ。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編

男と親方が向かい合つ。

最初の言葉は親方から放たれた。

「 いらっしゃい

言葉は威圧だ。

仮にも親方だ。

数々の徒弟・職人を束ねるこのパン屋の長である。威なきリーダーは抱える手も、短く、細く、弱い。この親方はその真逆とも言えるだろう。

「済まないな、このサイズのパンを 5ダース買いたい」

笑顔は威圧だ。

やはりこの男は戦人。

生において不敗を誇る剣の丘の主である。

力なき信念、信念なき力、この男が持つものはそうではない。信念を以つて振るわれる力、得難いそれを持つ。

交渉が、始まつた。

衛宮・士郎は大混乱していた。

……威圧してきたから威圧し返したけど何が起きてるんだー!? あれか!? 買い占め止めろって! ?

この男は戦人だ。

ポーカーフェイスを心得ていなければない。
そしてこの男。

混乱する頭の片隅で、すでに計算を始めていた。

「心眼・B」が火を噴く。

……しかし、この親方。こちらが別の店に行くと言つても止めるだ
らう。こんな空氣だしな・・・・！

どうしたものか、と男は勝算を練り始める。
そもそもまだ勝利条件すらはつきりしていなかったが。
やはり混乱していた。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルもまた混乱していた。

……何で鬭争の空氣なんだ！？パンだぞ！？されどパンだが、たか
がパンだぞ！？

この魔女もまた100年を超える年の功を持つ。

当然その混乱をおくびにも出さない。

否、フードがそれを隠しているのも勘定に入れねばならない。

フードが無かつたならば、彼女の混乱を悟る人間もいたかも知れな
い。

とは言え、悟れる人間が居たらソイツはきっと本人も知らないホク
ロを知つて居るに違いない。

……「ここで1ダースか2ダースか買つて他の店でもまた買えればいい
んじやないのか・・・・・・？」

この女は漢といつものをまだ知らない。

あと、100年間きっとずつとヴァージン。

だが残念ながら、3人の中で一番冷静だったのは間違いないく彼女だ。

密かに混乱する一人に対称、親方は意氣込んでいた。

……この男、出来る! なつぱきつと自分の聞いに答えるだ
る! つー

この親方、いかつい。

笑顔がどうしても怖くなる。

若いときはそうでもなかつたのだが、半端に歳を取るとどうしても
そうなる。

ここ数年、髪面で通しているのも有るだらつ。
だが、この髪も気に入っているのだ。

……この男・・・・・恐らく漢だ。流石に他の店に行くなどとい
うことはしないだらつー

やはりパン屋、職業上で人を見る回数が多い。

徒弟時代、職人時代、そして現在。

親方今まで上り詰めた人生経験はダテじゃない。

それと大きく外れてチャチャゼロ。

彼女はエヴァの影の中で既に起きていた。

……どうしてそういう空氣になんだよ・・・・・・・・・このつやつぱ馬
鹿なんじやねえの?

出会つ人間まで馬鹿つてスゲエな……。
御主人もどつか馬鹿だし……。

この人形、モノローグは片言ではない。
そしてこの人形、つまり人ではない。カウントは「一体」だ。

「まあ、話があるのでな。ちょっと、入つてくれんかね。入り口は案内するから」

「…………分かった」

親方が窓口を離れ、勝手口から士郎たちの元へ歩いてくる。

「では、ついて来てください」

士郎は頷く。

エヴァンジエリンは無表情。

二人は親方の後に続いて歩き、パン屋の中へ入る。

二人の旅人と親方はテーブルを椅子のある部屋に入る。
そして、周りに付いている徒弟が椅子を出し、二人に着席を促した。
3人が座り、テーブルを挟んで向かい合う。

「で、どういうことなんだろうか？」

フードを取つた白髪黒肌の男が、親方に問いかける。
その表情は、陰も笑もなく、穏やかであった。

それに対して親方は重々しい。

そして、一人を屋内に招いた理由を、本題を告げた。

「 5ダース」

最初にそう告げて、一つのパンを取り出した。

「 あんたらが5ダース欲しいのは、この形だな？」
そのパンのサイズは直径8インチのパン。
士郎が買い求めた種類のパンと同じ形だ。

「 ああ、そうだが・・・・・それが？」

「 4分の1。今日焼いたパンの4分の1。あんたが欲しい
と言つているパンは、そのくらいだ」

親方は事実を告げる。

この店では種類ごとに焼いている。
4回焼くが、それぞれ種類が違う。
サイズこそ違う。数も違う。だが、体積で考えれば確かに4分の1
だ。

「 でだ。あんたが欲しいと言つたこのパン。

来い！」

親方が徒弟らに呼びかける。

そして徒弟が5人、取りに向かった。

「 少し、待つてもらひ」

親方が言つ。

士郎は無言で頷く。

空気を震わせるのは外の喧騒。

だが、この場所に満たされた雰囲気は、張り詰めて停滞。何人たりとも乱することは許されない。

停滞を進行に変えられるのは、この後に持ち込まれるモノだけ。

……何か偉く大事になつて來たぞ！？

まだ混乱している衛宮・士郎。

……私の入る余地全く無しなんだが・・・・・！？

同じくメダニー、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

チャチャチャゼロは寝ていた。

……やはり出来る！

更に燃える親方。

そろそろ混乱中の二人に気づいて欲しい。

……何これ。

部屋に一人だけ残つた徒弟はそう思考する。

凄く居心地がアレだ、とも感じる部屋だ。自分のいる理由すらよく分からぬ。

早く戻つてこないかなあ・・・・・！

それから2、3分経つんだろうか。

あからさまに部屋に残つていた徒弟がホツとした顔を見せた。

そして、その両手が支えるのは盤のよのな盆だ。

士郎が指定した形のもので、未だ熱気を持っている。

「そう、あなたの欲しいと言った5ダース。ここに、確か
にある。それも焼きたてだ」
親方が言葉を再度紡ぎ始める。
そして、言った。

「これで、全部だ」

士郎がそれを聞き、逆に問い合わせ返す。

全部、どう？」

「ウチでは一日に四回パンを焼く。種類ごとにな。で、このパンは先刻焼き上がつたばかりだ。」

……成程、俺が5ダース買えればだ。今日この形のパンを買える人間は居なくなる、か。

士郎は状況に漸く合点する。

この親方は、たつた一人の密にこれ全てを売るというのは意に沿わないという。

……人間を見る目と言つものが鍛えられている。

当然か、親方なんだ。

恐らく、40にも入らないくらいだろう。

だが、密度の濃い人生を送つてきたはずだ。

数々の嘘を見つけてきた。数多の真実を求めて手に入れた。

そして今、この男は存在しているのだろう。

ならば、嘘は通用しない。

否、不要だ。

言おう。正直に。

「なぜ、5ダースも買う?」

「 今日はあと24食食べるからだ」

瞬間。

この空間は断絶され、建屋の外の喧騒は那由多よりも遠くへと消えた。

空気が凍り付いている。

どこから、ではない。

どこでも、である。

補充兼予習問題

一人のためのパンと、沢山の誰かのためのパン

どちらが尊い?

Answerer: 親方

- - - - -

この日取つた宿では、2泊していく事を決めていた。

それは魔法球を使い、幻術魔法まで一気に習得していくためだ。

そのため、今晩は、方曰、分入する予定ではあるが、たのたか

馬鹿正直に言う奴が居るかあ

エヴァの混乱は怒りも混ざつて極みに達した。混乱度のランキングが変動する。

……いや流石に嘘の通じない相手だつてのは分かる！
だが此方の混乱に気付いていない以上、『私達の嘘』は通じるとい
うことは分かるだろう！

未だボーカーフェイスの二人。

たが、エウアは心が大きく揺れた。そのため流石に気がかかるのでないか、と彼女は危惧している。

親方はそんな彼女の心配を他所に、重々しく問い合わせる。

「え？」

士郎が応える。

「え？」

111

100

流れるのは沈黙。

過ぎ行くのは時間

モレリ止み難いと感ひ問答

……そんな雰囲気出して『え？』とか言われても空恐ろしいだけだ
というのに・・・・・！
いや私は最強だから怖くないが！

怖くないつたら怖くない、エヴァはそう考えながら場の推移を見守ることにするのだが、

- 1 -

じれつたい、と思いを募らせるのみだ。

しまつた、やつちまつた・・・・・！？

馬鹿正直に言うのはやつぱりアレだつたか！？

士郎の混乱の連鎖、螺旋は止まらない。
渦を巻くのは田と状況悪化。

親方が再び話し始める。

「 マジ? 」

それは確認の問いかけだった。

眼は見開かれ、怪訝さを見て取らせる。
だが、この男の直観は『嘘ではない』と既に判断を下している。
だからこそ、いやしかし、の確認だ。

……『嘘ぴょーんキヤハハフヒヒ』とか言つたらどうなる…?
『心眼（真）：B』よー今こそ俺に絶対の未来予測を・・・・・・!

常識的な予測で以てしても、そんなことを言えば雰囲気が最悪まで落ち込むのは自明である。

この男、そろそろ落ち着けないのだろうか。

……此処まで来たなら嘘は不要・・・・・・・・

決意し、話す。

「ああ、実は 俺達は超大食いなんだ」

「 うわ、あんた凄いな」

一瞬の後、親方が返す。

本当に不思議なものを見た、と言つ顔で。

親方は大物というより天然だった。

屁理屈で言えば嘘ではない。現実時間に換算すれば、一時間に三食である。

どんな大食いなのかと。

ちなみに、暴食とは大罪である。

「まあ、あんたらが大食いなのは分かった。それは分かった。だが、それだけで売ると決めるつもりはない。

もちろん、このまま他の店に逃すつもりはない」

親方の眼光の属性が変わる。

天然さんから大物さんへ。

「で、だ。おたくら

ブリュッセルは大都市だ。

やはりカタギ以外の人間と出会う機会も全くないわけではない。

士郎は自身の素性を一部明かす。

嘘ではないが、全てでもない。

「……傭兵、だ。元がつくけどな。今はこの女性の護衛として雇われてる、ってとこだ」

その答えに、親方はふむ、と一つ息を付く。

そして、もう一つ質問を投げかける。

「差し出がましい問い合わせはあるんだが、何故、傭兵に？」

「正義の味方、ってのに憧れたんだ。自分の力で、多くの人いや、皆を救えたら、違う、皆を救うんだ、って。そう思つ

た

「その理想は何処から来た?」

「親父の叶えられなかつた夢を、カタチにしたい。そこからだ」

「アンタ、誰かを救えた実感はあるか?」

そこで、元傭兵は黙り込んだ。

ある。そうだ。あるはずなのだ。

だが、そう言い切れない。

自分が追われた理由を考えればそうだ。

救つたはずの人から恨まれる。それは救えたと言えるのだろうか。

「……ないのか」

その反応に、親方はがっかりしたような顔でそう漏らした。

「・・・・・少し、俺の話をしようか。構わないか?」

彼がそう言つと、目の前の男は神妙な面持ちで頷いた。

「俺の始まりは、やはりこの街のパンだ」

思い浮かべるのは子供の頃の自分だ。

……やんちゃなガキだったが、妙なところで素直な所があつたかな
あ。

「美味しい、と素直に思つて、そしてそれを作る人が眩しく見えて。
そこからだ」

いつも家のパンを買いに行くのは自分の役目だつた。
いの一一番にパンを食べられる、という理由もあつたのだが、

……たまに窓から調理場を覗いてたんだよなあ。

その光景の中には、当然パン職人の姿があつた。

自身の年の頃は9歳頃、その職人は当時おそらく20代後半だつた。

……汗水垂らして、太い腕で力強く生地を捏ねてなあ。
あれを見てて何だかなあ、格好良く見えたんだよな。

子供の憧れなどそんなものである。

これを書いているドアホも作業服に憧れたクチだ。

「憧れを手に入れたい、と。誰かに美味しいと言わせたいと、誰かを
食わせてやりたいと」

そこまで言つて、言葉を留めた。

そして、話しながら自分で気が付いた。

「いや、たつた一人の誰かの為に食わせてやりたいと思つた。

パン職人さ。

俺達に喰わせてくれたパンを作つたその人だ。俺が窓越しに見た
その人だ。・・・・・俺もアンタみたいになれたかな、つて聞き
たかつたからな」

そして願いを一つ手にして、彼はパン屋に奉公に出た。

最初は当然徒弟からだ。

徒弟とは徒弟制度に於ける最底辺だ。

親方の家に住み込んで雑用をこなし、その合間に親方の仕事を見習い、技術を磨く。

預り教育のようなものだ。徒弟の縁者がその教育費（これ以降は便宜上『学費』とする）を払う。

……あの時は無理言つたつけな。無理言つたつもりが結構喜んでくれて拍子抜けだつた覚えがあるけれどな・・・・・・・・・・！

徒弟の期間は2～4年。その間、縁者が学費を払うのだが、

……親不孝者にはなりたくなかつたから、必死でやつたなあ。

殴られることもあつた。

だが褒められることもあつた。

一喜一憂を繰り返し、だが精神も落ち着いてきた。

そして努力の甲斐あり、2年が経つ前に職人の仲間入りとなつた。つまり給料が出るようになり、家に金を落とすことが出来るようになつた。今まで払つてもらつていた学費に報いる時が来たのだ。

初めての給料、自分という職人のパンを持つて実家へ凱旋した覚えもある。

今日は実家に帰れ、と言われて金袋と自分で焼いたパンの入つた袋を握られた。

親方の粋な計らいだ。

……良い日だつた。ここからだ、つて気持ちも大きかつた。

本当に、良い日だったと思つ。

日々を回顧し、話の続きをへ戻る。

自分の憧れた職人と肩を並べて仕事をした。

年季こそ違うが、対等な立場で話が出来るのが誇らしかつた。

何より願つたことも叶つた。

「それで、その人に食つてもらつたよ。そしたら、美味しい、ってや」

憧れを、手にした。

自分にとつての信仰に報われたのだ。

「良かつた、とも思つたし、やつた、とも思つた。それ以上に、あつたのが」

そして、新しい願いが生まれる。

「これを皆に食わせてやろう、美味しいと言つてくれるだらうが、いやきつと美味しいはずだ、つてな。そうやつてやつてきて今の俺が居る。今や立派な親方だ」

話が終わつた。

「こんなもん有りふれた話だ。ただ、俺が親方だ、つてだけのな」

笑つてやつと、表情が再び真剣なものに変わる。眼は睨むように、眼光は探しを隠さず。

「俺は只者ではないな、って聞いたがな。傭兵であることを勘定に入れたとしても、やはりアンタは只者ではないと思うわけなんだが」

ため息と共に、表情が何処か憐れみを帯びる。

目の前の男の抱える何かに、不条理を感じているのだ。

「何故、なんだろうな？アンタが満たされないのは、何故なんだろうな？」

エヴァンジエリンは思考する。

既に冷静だ。話が眞面目な方向に向かつた結果だ。

……私を救つたとき、コイツはどんな顔をしていたかな。

エヴァの思索は先ずそこへと向かつ。

あの時は何が何だか分からないままで助け出された。混乱していたわけで、救けたその瞬間の顔を田にすることができたかも覚えていい。

あんなにも鮮烈だったはずなのだが、情けないことによく覚えていなかつた。

……あの養父のような顔か？それとも、何だ。 何も無かつたのか。

それならば歯痒い、と彼女は思つ。

彼女は善人としての思考回路も持つてゐる。

当然だ。誇り高き悪人だ。

悪が悪である理由を知ることは、善が善である理由を知ることと同意だ。

彼女は悪を自認し自称する。他によつて悪と認識され他称される。彼女は善の下に自己を否定し、悪の下に肯定する。

……この男は善人だ。

人を救うことで幸せになれる、幸福な人間のはずだ。

自らの本質を、本分を、本望を果たしているのだから。

壊れている、と言つことを勘定に入れたとしても。

それは報われるべきだ。

なのに、何故満たされない？救われない？

この男は何故幸せになれない？

納得が行かない。

悪を打ち倒すならばそれは善だ。この男は善なのだ。
ならば何故善であることを喜べない？

何故、が駆け巡る脳内。

だが、彼女は既に知つていて

知つてているが気付かない。

……違う。

そうじやないんだ。

この男は、自分を善と断言しない。

『正義の味方になりたい』とは言つたが。

しかし、それでも気付いては居るだろう。

凡そ全ては等しく正義であり、悪であることぐらい。

私が言つと何と言つか、自己弁護のよつて言い難いが。

だが、ここで彼女は『土郎についての』思索を止めた。

彼女は彼女自身を振り返る。

……ならば、何故私はこの人間を理解出来ないのか。

幸福になれないこの男の、その理由を。それを諦めていた、私は。

エヴァンジエリンは、自分が幸福を望むことを認めた。

……私は今、幸福・・・・・・なのだろうか。自分を肯定する人間が傍に居る。居てくれる。うん、それはきっと幸福だ。

エヴァンジエリンは、自分が幸福であると認めた。

……隣の男の事を理解したい、と思うのは。幸福である証で、贅沢なことなんだろう。

エヴァンジエリンは、他人を心配した。

……この幸福を運んできたのはこの男だ。私の誇りに懸けて、報いたい。

違う。

私は、この男が報われるべきだと思つ。

エヴァンジエリンは、この男の幸福を願つた。

……例え、私がシロウに殺されるとしても。文句など言わない。無抵抗でいるとも言わないが。死にたい迄ではないし。

私は、悪だ。

それだけの理由（罪）があるのだから。

エヴァンジエリンは、この幸福を諦めても良い、と考えた。

望んで、そして手に入つたというのに。
裏切られて善い、自分が傷ついて善い、と考えた。
数日前はその事を恐れていたと言つた。

……感傷だ。

こんなことを考えるなど、どうかしている、のか。

他人の事をここまで気に掛けるのは久し振りだからか。

エヴァンジエリンは自嘲した。

やはり、自分に幸福などは不釣合いだ、と。

この男には悪いが、お前は自分なんかを救けなければ良かつたのだ、
と。

幸福とは、罪なりしか？

それでは、この男と同じだと誓つた。

チャチャチャゼロは何となく起きていた。

主人の悩みを感じた、というのは嘘だろつ。

彼女はきっとそんな事は言わないし、事実だとしても言わないだろう。

……んな殊勝な従者でもねえしな。

今の状況が一番相応しい、と人形は考える。

…… わてさて・・・・・・ビーョ、これ？

この従者、何だかんだ優秀である。

主人が悩んでいることにも気付いているし、悩みの内容も大体察しが付いている。

…… 懐かしいな、こんな御主人は。あれだ、感傷的になつちまつて
よー・・・・・ 何だよコレ・・・・・・

こんな状態のエヴァは、人を殺す経験が浅かつた頃、チャチャチャゼロを作つて間もない頃以来だ。

…… ジれまた面倒なことで悩んでやがるなあ。

『”真祖の吸血鬼”エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル』の存在は害悪である。存在しているという認識はそのまま恐怖となる。誰かを幸せにしたければ、

……御主人、テメーは死ななきやならねえ。悔しいことにな。

そして、幸せになるならないに閑わらず、生きたいと願うだけでも、

……御主人、テメーは殺さなきやならなかつた。悲しい事だがな。

それでも幸せになりたいと願うのならば、

……御主人、テメーは どうすればいい？

殺して殺してまた殺して、幸福な生のためには生きなきやならねえ
のに、殺すから幸福にならねえ。

そろそろ、死に場所でも探すのか？

悩める人形は人知れず考える。

何だかんだで主人思いの良き従者だ。

結局彼女の結論は、

……生きてりや、いいことも有るや。 現にこうなんだ、生きてて 良かつたろ？

生きること自体にや、罪が有る訳ねーよな？

ただ、生きにくい身の上のせいだ。

そう考え、再び眠ることにした。

だが、眠る前に一つの考えが浮かんだ。

……この一人、微妙に似た者同士なんじやねえかな・・・・・?

この沈黙は静の水盆。

次の言葉は波紋となる。

雪を落としたのは親方だった。

「・・・・・俺だけ熱く語っちゃってスマンな。

だが、

「ひおりおひ

交渉の体を為しては居なかつたが、親方はそのような形式で答えを返す。

「悪いが、売ることはできない。アンタはこれを全て売つて良いと思わせる程の人間ではなかつた、と謂わせてもらひ

そつ言つて、士郎の注文を却下した。
しかし親方は、だが、と言葉を継ぐ。

「1ダースまでなら売る。あと、詫びだ。2つ無料で持つていけ。
昼、食べてないようだが

合つてるな？」

その好意ある行為に、士郎は眼を閉じ礼をする。

「・・・・・・・・
「恭」

「いや、礼は要らんや。1つちだつてアンタの注文を却下したんだ
からな。どちらかといつと俺が責められるべきなんだがな」

そう言つて親方は笑つ。

申し訳ないな、と言葉を付け、パンを二つ握んで田の前に並んだ二人にパンを手渡す。

2人は受け取ると、彼に黙礼した。

「で、1ダース。買つていくか？」

「・・・・・・・・・・ああ、よろしく頼む。この袋に詰めてくれ」

「相分かつた。　　おい、コレに詰めとけ！1ダースだ！」

徒弟に袋を受け取らせ、その中に13個のパンを詰め込ませる。

『パン屋の一ダース』という言葉がある。

パンは当然ながら、焼きたての時が一番大きく膨らんでいる。

その後は水分が抜けたり空気が抜けたりで小さく、軽くなっていく。

その上、全て均等な大きさで焼くなど非常に困難だ。

パン屋がパンを、重さを誤魔化して売るなどとんでもない不届きである。

先述した理由で重さが変わった結果、『誤魔化しがあった』などと言われては溜まつたものではない。

そこで、背に腹は変えられぬ、と上方に最初から積んでおくという方策を取つた。

重さが記載量以下になるのが問題なのである。

つまり、最初から記載料より重くしておけば、例え時間の経過でパンが軽くなつたとしても問題はないのだ。

そういうわけで、パン屋の一ダースは13、もしくは14を指すのである。

そして、二人は静かにパン屋を出た。

外は、雨が降つていた。

全てを曖昧に変えていく流れ。

パンを齧ると、ほのかに酸味がした。

物事には始まりがある。

始まりってのは一番大事なんじゃないか。そう思う。終わりというか、その先も大事だと思うし、そっちが一番尊いと

思ひ人も居る筈だかな

やはり始まりは「(い)」とかんだと思ふわけだしな。

最初から全てを望んで、それで良くな、つて。
満たされないのに、何でやつてられるのか、つて。
闇雲に進んで、幸せじゃなくて、何でそのまま面接られるんだ、
つてな。

最も美しい広場の街・ブリュッセル 後編（後書き）

散々待たせてこんな内容だよ！

あんまり間をあけるのもアレだと思ったので、また分割で御座います。

その晩、パンを3つ持つて、彼らは魔法球へ入った。

パン屋を出た後、結局4軒のパン屋を梯子することになった。そして何とか5ダースのパンを用意することが出来、修行の体勢が万全に整つたはずだったのだが、

……何というか、気まずいな。

この手の話は何というか、やはり苦手だな。

そう思考するのは衛宮・士郎。

彼は見えなくとも、一種の狂人である。

彼は自分自身を度外視する、つまり彼のスタンスとは『自分自身以外全ての味方』というものである。

当然他人になど理解されない。

……何度も言われたことではあるけど、やっぱりコレばっかりは直らない、か。

自身も歪みを何処か自覚している。だが、それを修正する気はない。

救済とは、贖いなりしか？

今回の纏め

パン屋でゴタゴタあって5ダース買はばすが1ダース
結局後4軒回つて5ダースだヒヤツハ
あと昼飯は一軒目のパン屋さんがくれたありがとう

そして、自分が他人と比べて、
歪んでいることを否定できない。

だが、彼は根本的には気付けない。

ベビーハンジング

前のシートたる、早くなんとかしない

衛宮・士郎の歪みはある致命的な欠点を抱える。人間として非常にマズイ所だ。

『人の心配を正しく一切愛才取れない所だ。』

もこれは酷いもので、
例えるなら、

死亡フラグ満載な重症を負つていた所で身体を動かして更に立ち向かうし、

軽傷な仲間の方を「動くな死ぬぞ莫迦！」と諭したりで。

それ故に、この男が他人を心配して先に説得力があるが語る。この男の得意に馬鹿にしているのが

だから違和感があり、理解が出来ず、その裏に何か恐ろしい物が有

るよつに見えてきてしまつのだ。

だがメタ的に言つてしまえば、最も恐ろしいのはあらゆる死亡フラグを豪快に折つて行くことなのだが。アヴァロンさんチーツス何時もご苦労さんツス。

疑心暗鬼とは恐ろしい。加速し、伝染し、発症すれば悍しい事態となる。

様相も惨憺たるものながら、その後も酷い。

ある人は後悔し、ある人は排されて当然と言つて腕を組み、ある人はさらに暗鬼を心の中で育てる。

それら全てが、この男の敵だ。

後悔しても償わず、当然なのだからと無感情であり、疑心暗鬼はこの男の天敵である。

否、違う。

それら全てが、この男を『敵』とする。

それらの人々は救われていない。

救われるためには気付かなければならぬ。信じなければならぬ。

故に、衛富・士郎は救われない。

救われるのが先か、救うのが先か。

前提の崩れたループは捻れ狂う。

歪んだ円環は本来の在り方を留めない。

彼は螺旋の最先端。

この世全ての悪を背負う者なり。

だから、彼は報われず。

しかし、彼は折れず。

そして、彼は何も得ることは無い。

遂には、彼は悲嘆の極みへ至るのだ。

とは言うものの、一つ言えることがある。

彼は『彼自身の正義』に殉ずることはない。

『所謂正義』というモノに殉ずるからこそ、それでも『正義』を名乗らないからこそ、『正義の味方』に最も近いのだろう。だが、それは極僅かな例外を除いて最も多くの人間を敵とすることである。

尤も、彼は『彼自身の正義』を未だ持っていないからなのが。

何にせよ、『彼』がもう一人の『アンリ・マコ』と成ったのは当然だった、ということだ。

『善』へと捧げられた生贋だ。善の為すただ一つの悪行だ。

少し肌寒い空気が世界に包まれている。

太陽が頂点に昇っている。

大体正午だ。

視線を下げれば、穏やかな水面に光が反射する様が見える。

ダイオラマ魔法球内。

湖に浮かぶ島の上。

大部分に平原が広がっており、所々で人影が見かけられる。しかしそれは人形だ。

エヴァンジェリンは卓越した人形遣いでもある。
ドールマスター

彼女の特筆すべきスキルの一つである。

島には平原だけではなく、森もある。

島の最大径は大体2km程だ。

その中心にそこそこの規模で広がっている。

木の手入れをする人形もあり、管理された森であることが分かる。

湖岸から30m程離れた所だ。

地面は草原が広がり、平地であるため適度に風が吹き快い。

その辺りに、家が建っていた。

藁葺きの屋根の石造建築だ。

煙の立ち上る煙突もある。

その家のリビングに、二人が居た。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

衛宮・士郎。

『5日』が経過した。

基礎から集中して叩き直し、ボロボロながらも驚くべきスピードで幻術魔法の修行まで辿り着いたのだが、

「……うーん……まあ、戦闘魔法は省いて来た訳なんだが」

呟いたのはエヴァンジェリンだ。

20代の女性の姿だ。

木床の上に質素な木製の4脚丸椅子が立つており、膝に両肘を付き、手の甲で顔を支える姿勢で座っている。

今日の彼女の格好は浅葱色の着流しだ。帯は紺色である。士郎の投影品であり、元は切嗣の着ていたものだ。

士郎の記憶の中で見た着流しに興味を持ち、着方はよく分からぬものの、取り敢えず見て思つた通りに着てみている。だから少し乱れてはいるが、概ね合つてゐる、と言つたところである。

帯が後ろ腰に蝶蝶結びでリボンのように結ばれている。

火の爆ぜる音が暖炉から聞こえ、水盤の水のような静けさに、僅かな波紋を起こしている。

暖炉には火が入っている。

火をくべる従者人形も傍に控えており、森から調達した薪も十分数が準備されている。

従者人形は暖炉の右手5歩程の場所に立つている。

暖炉を横から見つめる形だ。その脇に薪が積み上げられている。

膝丈・袖の長いドレス、白い飾りのないシンプルなエプロン。

質素であり派手ではないが、清潔感があり『清浄』の言葉が似付かわしい。

エヴァンジェリンの視線は人形の方ではない。

低い姿勢のまま真つ直ぐに見ている。

そこには、外套を着た赤毛の少年がいた。
歳の頃は10を越えない程。

エヴァンジェリンも見た、過去の衛宮・士郎と寸分違わぬ姿だ。
無論中身はあの男なのだが。

「お前の特異性を考えてみれば、確かに当然の結果とも言えるかも
しれんな……見事なものだ」

「そうか……やつぱりか」

田の前の少年も、自分の特異性を自覚している。

幻術とはイメージの具現である。

エヴァンジエリンの今の姿も、彼女の成長した姿の『イメージ』に過ぎない。

故に士郎の強固なイメージ力は幻術において大きなアドバンテージとなる。

彼の投影を支えるのは構造把握能力だけではない。幻想を支え続ける意志力とイメージ力もあるのだ。

エヴァンジエリンは少し、奇妙な事を考えついた。

……もしかすると……物にも化けられるんじゃないかな？

いやいや、とその考えを収めるが、いやもしかすると、とまた飛び出してくる。

……まあ一度やらせてみればいいんじゃないかなー? うん、別にいいだろ!

と考え至り、

「シロウ、取り敢えずそれを解け」

「ああ、分かった。ディスブルサーティオ解除」

解除呪文と共に小さな爆発。

それと煙が起る。

そして煙の後には、

……あれ？ 小さいのから大きいのになるから……？

そこには全裸があった。

身の丈190cm近くある、鋼のように鍛えあげられた肉体だ。肌の色も黒い。それも相まって更に剛健さをイメージせられるのだが、

「き

……き？ き がい？ 脈絡ない上にいきなりだな！？ ……いや待て、まだそう決まつたわけじゃない。

一体何が言いたいのだろう、と考える衛宮・士郎。

思索を巡らせてみるが、直ぐに答えは眼の前に降臨した。

「きやああああああ！」

次の瞬間、全裸が暖炉に叩き込まれた。驚くことに、従者人形すら目を見張っていた。

急ぎ暖炉から士郎を引っ張り出し、消火のため凍結させた。すると出来上がったのは、

……ぜ、全裸のオブジェ……やつてしまつた……！

顔を真っ赤にして全力で後悔するエヴァンジエリン。とりあえず大きな布を従者人形に持つてこさせ、氷の柱に被せさせた。

そして、暖炉の傍に置いて自然解凍を待つた。

しばらくして、氷が緩くなつてくる。

内側から破ることも容易に成つてくる。

そういうわけで、士郎は氷を破る。

状態は布を被つた全裸である。

そんな状況ではあつたが、エヴァは言葉を紡ぎ始める。

「…………すまん！」

立ち上がつていた彼女に頭を下げられる。

確かにいきなり暖炉にブチ込まれるのは酷いとは思つが、自分も油断があつた。

そうだからいきなり全裸を晒すことになつたのだから自分にも責任はある。

危機管理能力が下がつているな、と何となく考える。だから、

「いや、俺も気が付くべきだつたからあまり気にしなくていい。それより、何か他にあるか？」

いきなり幻術を解け、と言つてきたのだ。

何か問題があるのか、他の事をするのか。それくらい聞かねばなら

ない。

そう思考した。だから聞いた。

「ああ、えーとだな。もしかしたら、物体にも化けられるんじゃないか、と思ったんだ。もちろん私はやつたことが無いけどな」

士郎は、成程、と思つ。

自分の特性上、モノを作るのが得意中の得意だ。
ならば、イメージを現実上に結ぶ投影と幻術が無関係ではないのだから、

「剣、に化けてみる、つてどこか？」

「まあお前のしつくり来るモノに化けて見てくれるか？それが剣ならそれでいいんだが」

分かつた、と返して内面に視点を持つていぐ。
自分の身を剣に変える。

正しく自分に変わるという工程だ。

・・・・・自分のしつくり来るモノ、か。

内面から探す。

カリバーンではない。ゲイボルグでもない。あの大英雄の石剣でもない。
ならばあの双剣か。
否、自分の表現として適當なのは、

「多分、こんな感じじゃないだろ？」

士郎はそう言つと、幻術を開始させる。

イメージする。

無限の剣製の表現だ。

それが自分自身の表現とほぼ等号で並べられるはずだ。では、どういう形だ。

・・・・・ どのような剣をも内包する『モノ』。

剣は剣を内包し得るのか、と土郎は考えた。

だが、剣は改修・改造の余地こそあれど一つの終着点である。かと言つてそこから形を変えることが出来ないのか。そうではないのだが、

・・・・・ そういうことじやないんだ。全てであり、全てでない。それが『無限の剣製』。そこには全てがあり、おそらく全てが存在しない。

だから、土郎が選んだのは全ての始まりの形だつた。

床に塊が生まれた。

そこには、インゴットがあつた。

鋸びた鉄のような赤を基本に、不規則に色が変化している。材質が何なのか、推して測ることは不可能。

端近くには、不自然な事に赤い硝子玉が埋め込まれている。炎が網目のように奔つてゐるが、温度は人の温度に近い。当然ながら、そのインゴットは生きていた。

『これでいいか?』

インゴットから念話が聞こえる。

土郎の声だ。

発声する器官は金属塊に存在しない。故に声は空気を震わせるものではなく、意志に触れる形になる。

—ああ・・・・・・・

エヴァンジーランはそのままくつむかへて、歩み始めた。見下ろした田線の先のインゴットを手に取つたとする。

・・・・・ 剣では、無いんだな。

エヴァンジエリンはまずそう思つた。

だからだ。

・・・・・インゴットといふれば、剣の前段階？

士郎というモノの全貌を知らない彼女だ。
それだけの印象で終わるのは仕方がないことだ。

思考は手に取らうと地面に屈む動きの中の出来事だ。

右手を伸ばし、
手に取る。

厚ねば體の三穴の 一 番だ。

・・・・・ 見た目より重いな。

そもそも材質がどういう物なのか分からぬのだから、外見から重さを推測するのも少し無理があるのだが、それにしても重い。

気になるのは重さだけではない。

一点異彩を放つ、硝子玉。

これは何なのだろう、と思索と共に覗き込む。

「何だ、これは」

その硝子玉は朱かつた。

その中に映つた風景が朱いからだ。
鮮やかではなく、やはり朱い錆色。
朱い大地が広がっていた。

そこには数多の剣が突き立つている。

・・・・・魔法球を外側から見るのに似ているな。

世界を内包する魔法球。

それと類似するその硝子玉の正体こそ、

『俺の、心象風景だ』

・・・・・え？

その男はその荒野の中に立っていた。

小さく見えるのは男の姿。

だが、視線を感じた。

恐らく相手もこちらの視線を感じているのだろう。
目が合つた、のだと彼女は思う。

士郎の説明は続く。

『俺のいた世界では、極稀に俺みたいな奴がいる。自分固有の心象風景を持ち、尚且つそれを世界に「押し付ける」ことが可能な存在が』

聞く。

「…………つまり？」

『簡単に言えば、この異界を現実に存在させることが出来る。流石にそんな常識破り、時間制限はあるけどな。用語で言つならば、『アコティ・マーハル 固有結界』』

驚き呆れる。

だが、聞きたいのはそういう事じゃないかもしない。
本当にその世界に立っているのか、といつゝとか。
しかし、

「お前は、ここにいるのか？」

彼女は、何となくそう聞いた。

寂しそうにしているようには見えない。

だが寂しく見える彼が、どうしても可哀想に思えたからだ。

今ここに一人で居るはずなのに、どうしても遠く見えて悲しかった。
そして、その世界に至るまでの道程が気掛かりになつた。

・・・・・しかし、聞くだけでは不公平だ。
自分も見せなければ、釣り合わないだろ。

そう思つて、インゴットに額を当てた。

「シロウ」

『・・・・・いきなりどうしたんだ?額くつ付けて』

「今から私の過去を見せる」

恐らく理由を言つと断られる。

だから是非なく始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189v/>

Fate/Distorted Destiny IN Magister Negi Magi 第一部らしいですよ？

2011年10月8日16時07分発行